山形県上山市埋蔵文化財調査報告書第３号

上山市久保手窯跡

発掘調査報告書

1983

上山市教育委員会

序

上山市内の古窯跡は、昭和32年、市内葉山古窯調査に始まり、三千刈、大石藍、久保手に至る西山一帯から更に山形市小松原の丘陵地帯に展開している。

これらの古窯群は時代の要求によった専業の陶工（工人）組織によって作られ、適した環境と良質の陶土、燃料、水を求め移動したものと思われる。

昭和54年７月、市内四ツ谷、三千刈土地区画整理事業を実施するにあたり、柏倉亮吉先生におねがいして、発掘予備調査を実施いたしましたところ、八世紀から九世紀にかけてのものと思われる窯跡が多数の遺物とともに確認されました。

今回の発掘は、昭和57年に建設された上山城に展示される上山の古代史をさぐる意味での資料収集のための調査であり、展示される資料確保の面から調査したものであります。

このたびの調査にあたりましては、12月の厳しい気象条件下の、しかも限られた期間内での調査でありましたが、担当していただいた各先生方からは全面的なご協力をいただき、その成果は大きく見るべきものがありました。深く感謝申し上げます。

本報告書は、上山市埋蔵文化財発掘調査報告書第３号として発刊いたします。今後皆様方の研究の一助ともなれば幸と存じます。

昭和58年12月

上山市教育委員会
教育長　佐藤　登

例　　言

1．本報告書は、上山市教育委員会が主体となり、昭和56年11月に実施した久保手窯跡の発掘調査報告書である。本書は、あわせて当該地域に所在する窯跡群についても参考資料として掲載した。

2．調査にあたっては、山形県立博物館、当時の上山城建設準備室などの諸関係機関の協力を得た。ここに記して感謝を申し上げる。

3．調査体制は下記の通りである。

調査主体　上山市教育委員会

調査担当　上山市教育委員会社会教育課

調査担当者　主任調査員　柏倉　亮吉

調　査　員　保角　里志（県立博物館研究員）

茨木　光裕（日本考古学協会員）

調査参加者　上山市社会教育課員、土木課員、上山城建設準備室員

事　務　局　事務局長　佐藤　　登（上山市教育委員会教育長）

事務局員　一柳　悟朗（上山市教育委員会社会教育課長）

黒田　啓蔵（上山市教育委員会社会教育課主査）

4．挿図縮尺は、遺構平面図では$\frac{1}{40}$、遺物は土器実測図$\frac{1}{2}$、$\frac{1}{3}$を原則とし、それぞれスケールを示した。また窯跡付近の平面図は、字切図を基に現場で実測修正して作成した。

5．本報告書の作成は、茨木光裕が執筆し、土器実測および挿図・図版作成は執筆者が行ない、佐藤千春の援助を受けた。本書の編集は茨木光裕が担当した。

6．本報告書の作成に際しては、尾形与典氏（山形県立博物館）、佐藤庄一氏（庄内教育事務所）、佐藤鎮雄氏（南陽市立赤湯中学校）、高瀬助次郎氏（山形市谷柏在住）らの助言、御教授を受けた。また、資料の発表に際しては、加藤　稔、小野　忍両氏の御協力を受けた。記して感謝申し上げる。

目　　次

Ⅰ　調査の経緯

1．調査に至る経過…… 1

2．調査の経過…… 1

Ⅱ　窯跡群の立地と環境…… 3

Ⅲ　遺構について

1．久保手２号窯跡…… 6

2．久保手１号窯跡…… 9

3．１号土坑……11

Ⅳ　遺物について

1．久保手２号窯跡出土の遺物……14

2．久保手１号窯跡出土の遺物……15

3．久保手１号土坑出土の遺物……15

Ⅴ　各窯跡群について

1．オサヤズ前、オサヤズ窯跡……23

(a)　位置及び経過……23

(b)　出土遺物……23

2．長者屋敷窯跡……27

3．小松原窯跡……28

(a)　位置及び経過……28

(b)　小松原１号窯跡と出土遺物……29

(c)　小松原２号窯跡の出土遺物……32

(d)　小松原窯跡Ｂ地点の出土遺物…32

4．熊野堂窯跡……35

5．四谷窯跡……36

6．三千刈窯跡……36

7．葉山窯跡……37

Ⅵ　考　　察

1．久保手窯跡検出の遺構について…39

2．久保手窯跡出土の遺物について…40

3．法量と形態……43

4．周辺地域の窯跡群について……47

(1)　瓦について……47

(2)　須恵器について（窯跡編年の試案）……48

Ⅶ　総　　括……49

挿図目次

第１図　窯跡群位置図…… 2
第２図　窯跡群立地図…… 4
第３図　久保手窯跡平面図…… 5
第４図　遺構配置図…… 6
第５図　２号窯跡実測図…… 8
第６図　２号窯跡層序図・断面図…… 9
第７図　１号窯跡層序図……10
第８図　１号窯跡実測図……10
第９図　１号土坑実測図……11
第10図　須恵器分類図……13
第11図　２号窯跡出土遺物実測図(1)……17
第12図　２号窯跡出土遺物実測図(2)……18
第13図　２号窯跡出土遺物実測図(3)……19
第14図　２号窯跡出土遺物実測図(4)……20
第15図　１号窯跡出土遺物実測図……21
第16図　１号土坑出土遺物実測図……22
第17図　オサヤズ前・オサヤズ窯跡平面図25
第18図　オサヤズ窯跡出土遺物(1)……26
第19図　オサヤズ窯跡出土遺物(2)……27
第20図　長者屋敷窯跡付近平面図……28
第21図　小松原窯跡付近平面図……29
第22図　１号窯跡実測図……30
第23図　１号窯跡出土遺物実測図(1)……31
第24図　１号窯跡出土遺物実測図(2)……32
第25図　２号窯跡出土遺物実測図……34
第26図　Ｂ地点出土遺物……35
第27図　熊野堂窯跡付近平面図……36
第28図　三千刈窯跡付近平面図……37
第29図　三千刈窯跡出土遺物実測図……38
第30図　葉山３号窯跡実測図……39
第31図　葉山窯跡出土遺物実測図……39
第32図　久保手窯跡出土遺物組成図……43
第33図　口径・底径・器高度数分布図……45

付表目次

第１表　須恵器分類表……13
第２表　各遺構出土遺物分類表……23
第３表　上山西部丘陵地域窯跡群地名表…23
第４表　久保手窯跡出土遺物組成表……43
第５表　久保手２号窯跡出土遺物計測表…46
第６表　口径度数分布表……47
第７表　底径度数分布表……47
第８表　器高度数分布表……47
第９表　口径・器高相関表……47
第10表　各窯跡出土遺物組成表……51
第11表　窯跡編年表……51

図版目次

図版 1　久保手窯跡遠景　久保手窯跡近景

図版 2　遺構確認風景　遺構確認状況

図版 3　2号窯跡確認状況　発掘状況

図版 4　2号窯跡全景(1)、(2)

図版 5　2号窯跡側壁状況　2号窯跡前庭部状況

図版 6　2号窯跡出土遺物状況　窯跡重複状況

図版 7　1号窯跡全景　1号窯跡セクション

図版 8　1号土坑全景　2号窯跡復元模型

図版 9　2号窯跡出土遺物 (1)

図版10　2号窯跡出土遺物 (2)

図版11　2号窯跡出土遺物底部状況

図版12　オサヤズ前・オサヤズ窯跡近景　小松原窯跡A地点近景

図版13　小松原窯跡B地点近景　B地点出土軒丸瓦（瓦当面）

図版14　B地点出土軒丸瓦（裏面）　熊野堂窯跡遠景

図版15　熊野堂窯跡近景　三千刈窯跡軒丸瓦

Ⅰ　調査の経緯

1．調査に至る経過

上山は、市街地の中央にある天神森（月岡）の地にあった城を中心として発展し、羽州街道の宿場として、また、出湯の町として繁栄した城下町である。ところで、上山市では、新生上山を期して、新しい観光の拠点となり、地域にねざした文化の拠点としての上山城の建設準備を進めていた。市内の西部に連らなる丘陵には、以前から須恵器・瓦等が採取され、窯跡が点在することが周知されており、昭和32年には、上山市高松葉山に所在する窯跡の調査が行なわれている。[1] そのような状況をふまえて、復元される上山城の城内に窯跡の復元模型を展示する旨の計画があった。

ところで、保角、茨木は、当該地域に所在する窯跡群の一般調査を行っていたが、久保手窯跡において、ブルトーザーによる整地作業が行なわれており、灰原と思われる地域に多量の須恵器片が散布していた。遺構の存在が想定されたので削平された地域を中心に面整理を行ったところ、窯跡と土坑状の落ち込みを確認するに至った。

市では、上記の点をふまえて、関係各機関と協議し、久保手窯跡の保存、及びその活用のため、調査を実施するに至ったものである。

2．調査の経過

調査は、上山市教育委員会を主体として、昭和56年11月26日から11月29日までの4日間にわたり実施した。窯跡は、以前にブルトーザーによる整地作業によって表土が削平されており、一般調査時に確認された遺構周辺の面整理、平面プラン確認の後、窯跡内覆土の掘り下げを行った。

完掘後、窯跡の主軸方向とそれに直交する焼成部の一断面にたちわり溝を設定し、側壁、床面の状況を調査したところ、その下位に時期を異にする一時期古い床面を検出した。調査の結果、重複する2基の窯跡であることを確認した。便宜上、下位の窯跡を1号窯跡、重複する上位の窯跡を2号窯跡とする。

遺物は、各窯跡から検出され、編年的にもかなり良好な資料を得ることができた。調査終了後、遺物の整理、分類を行なったが、遺構は、そのまま現地に埋め戻した。

また、2号窯跡は実測図・写真等を基礎資料として復元模型が作成され、上山城に展示されている。

1 オサヤズ前窯跡　3 長者屋敷窯跡　5 久保手窯跡　7 四ツ谷窯跡　9 葉山窯跡
2 オサヤズ窯跡　4 小松原窯跡　6 熊野堂窯跡　8 三千刈窯跡

第1図　窯跡群位置図

II　窯跡群の立地と環境

山形県内において、須恵器・瓦等を生産した窯跡は現在まで、約60ヶ所あまりが確認されている。これらの生産は、専業の技術者集団（工人）によってなされたものであるが、その成立の背景には、原料陶土の存在・燃料・水の供給といった諸条件を具備する必要があり、そのような適地に群在して窯跡が分布している。

山形盆地では、山形市松原から上山西部にかけての地域、山辺町玉虫沼周辺、寒河江市平野山、天童市二子沢周辺などに集中して分布している。これらの窯跡は規模の違いはあるものの数基～数十基の窯跡からなる小支群を形成し、地域的なまとまりをもつ窯跡群として把握できる。今回調査を実施した久保手窯跡は、所謂、上山西部丘陵窯跡群の一支群である。

山形盆地の南西縁、山形市松原から上山市西部にかけての地域は、盆地の西縁を区画する標高 250 m内外のなだらかな波浪状の丘陵が続き、当該地域に 9 ヶ所の窯跡が分布している。（第１図）

この丘陵は、盆地の西縁につらなる出羽丘陵から派生した白鷹丘陵の一角を占め、平野部からの比高は約60mを測る。丘陵上は、意外と平坦で、その平坦部に山形市小松原、上山市久保手などの集落が点在する。現在では、丘陵の斜面は一面のブドウ畑であり、平坦部は水田として利用されている。

各窯跡群の分布をみると、次のような地域に立地している。いずれも背後に平坦地をひかえた立地状況にある。（第２図）

(1)　盆地と丘陵の傾斜変換線付近の斜面

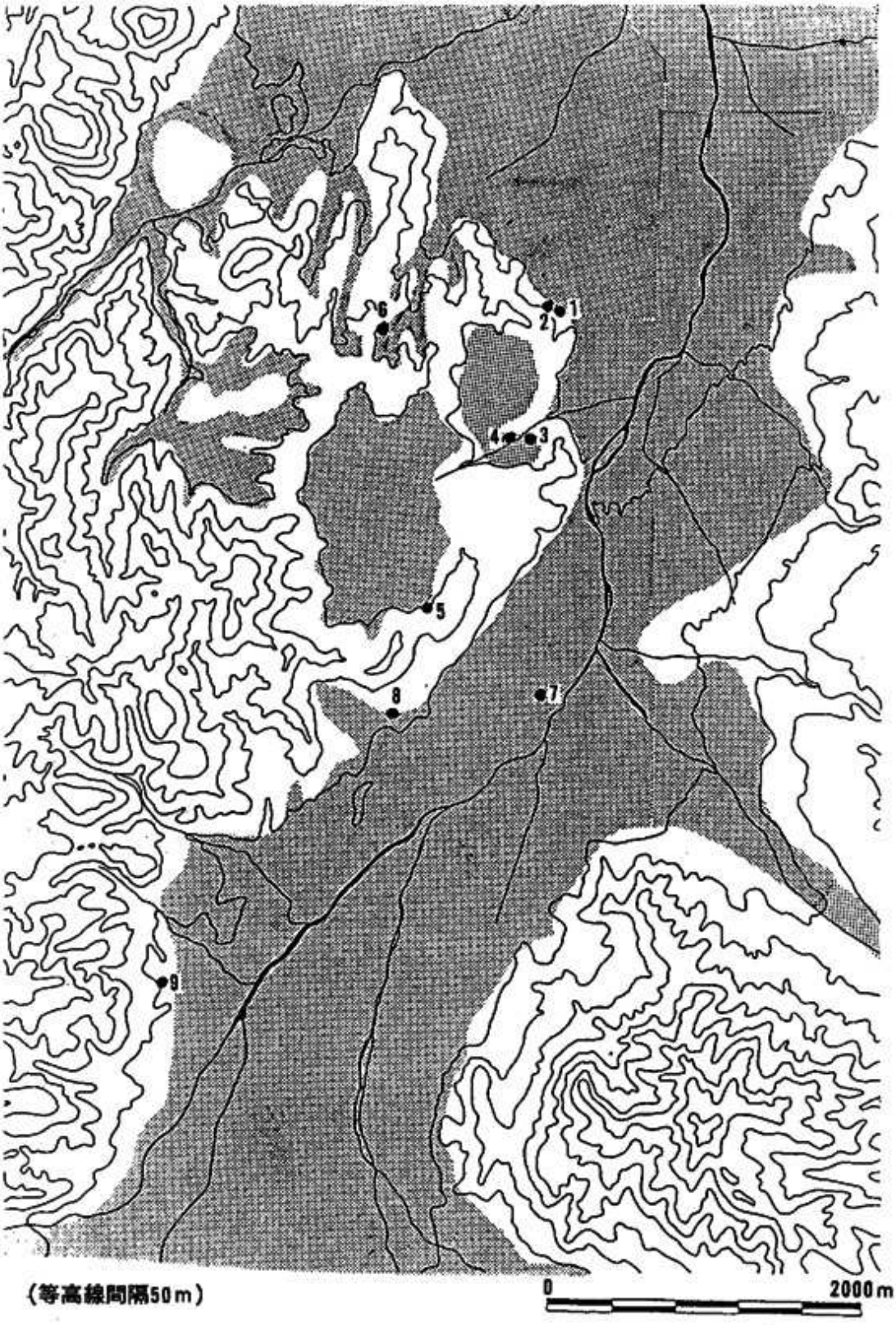
(2)　盆地の縁辺で谷が深く丘陵に入り込んだ谷頭付近の斜面

(3)　盆地内を北流する須川の河岸段丘上の斜面

(4)　丘陵上の平坦部縁辺の斜面

(1)には、山形市オサヤズ、オサヤズ前窯跡、上山市三千刈、葉山窯跡がある。(2)には、山形市熊野堂窯跡、(3)には、上山市弁天窯跡、(4)には、山形市小松原、長者屋敷窯跡、上山市久保手窯跡などがある。

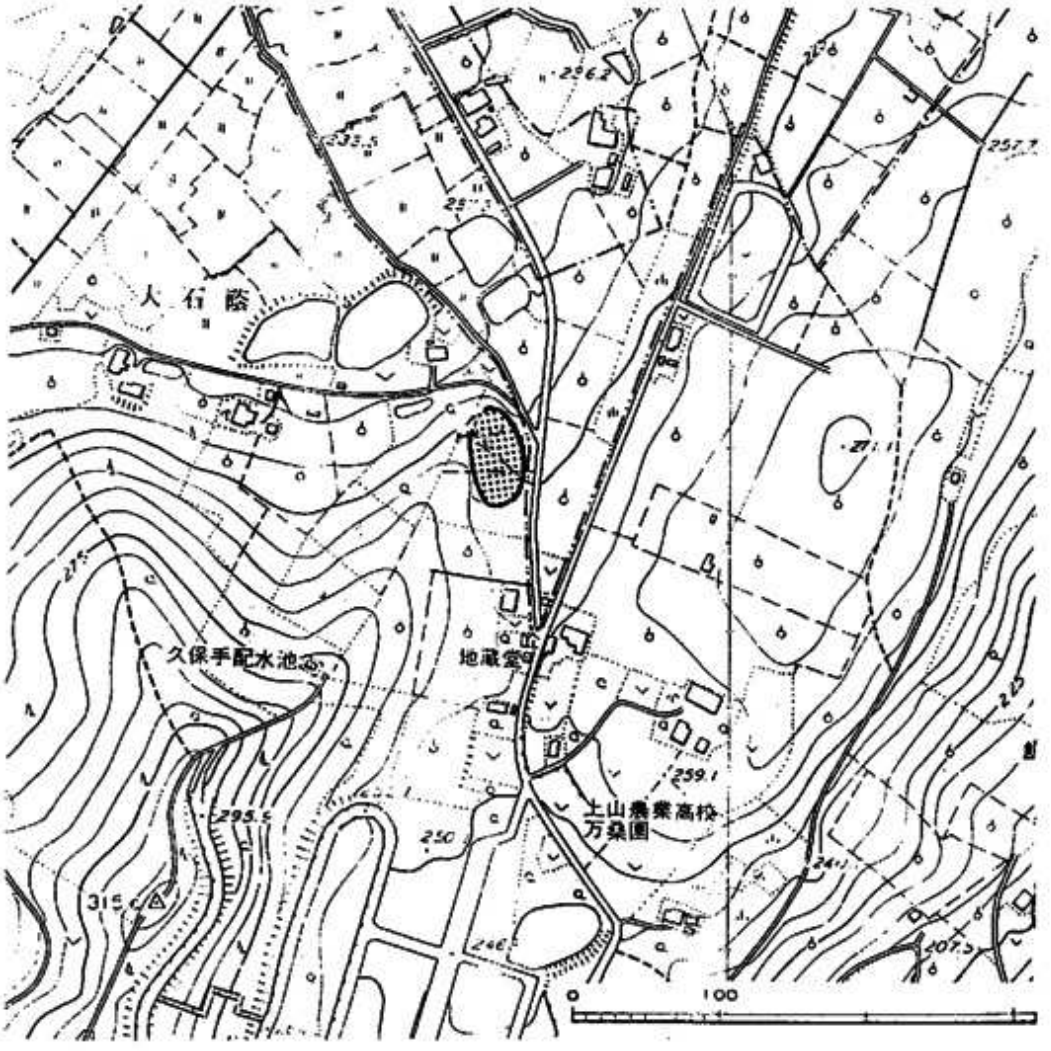
今回調査を実施した、上山市久保手窯跡は、上山市四谷からIH羽州街道を西進し、丘陵を登りきった上山市四谷、地蔵堂に所在する。付近は久保手原と称する平坦地が広がって



第2図　窯跡群立地図

おり、周囲を山丘にとり囲まれた小盆地状の景観を呈する。窯跡は、その小盆地の南縁で北方に張り出した尾根の先端部にあり、東面する斜面に立地している。標高は、250 mを測り、現在は牧草地として利用されている。遺跡のすぐ東側を市道四谷～久保手線が南北に走っている。(第3図)

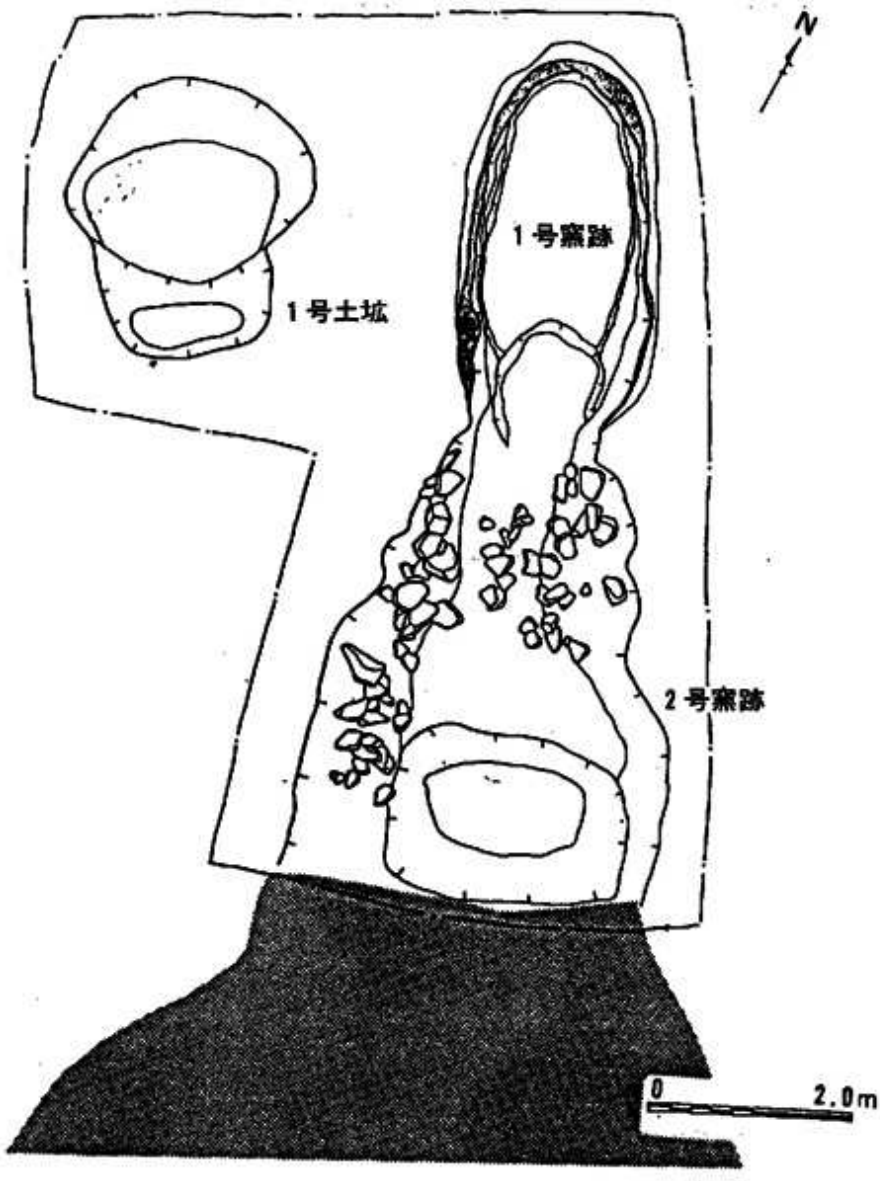
遺跡は、以前、雑木林であったものを伐開した際、偶然に発見されたもので、久保手窯跡として周知されていた。昭和56年秋、牧草地の整地作業をした際、偶然に窯跡の上部を削平し、それが今回の調査の契機となったものである。



第3図　久保手窯跡平面図

Ⅲ　遺構について

今回の調査によって確認された遺構は、２基の重複する窯跡と、その南側に隣接して検出された土坑状遺構、１基である。（第４図）



第４図　遺構配置図

１．久保手２号窯跡（第５図）

本窯跡は、ブルトーザーの排土板により窯体の上部を削平され、一部焼土が露出してい

たため、これが発見の契機となったものである。

窯は、地山である黄褐色粘質土に掘り込まれた、所謂、半地下式無段窖窯で、一度掘り込んだ後、内面にスサを混入した粘土で整形されたものである。窯跡は、焚口部を東に向け、主軸をN40°Wに求める。(第5図)

天井部は崩落していたが、床面・側壁とも比較的良好に形状を留めており、残存する側壁の形から断面アーチ状になる天井を有していたものと思われる。

現存長8.2mを測り、焼成部、燃焼部、焚口部とも良好に遺存しており、ほぼその全様を知ることが出来る。焼成部長は、3.4mで最大幅はほぼ中央部にあり、1.5mを測る。窯尻付近では0.8mである。平面プランは、胴張りの形態を呈し焼成部下位でややすぼまり燃焼部へと移行する。

燃焼部の幅は、上場で2.3m、下場で0.8mを測り、壁は掘り込んだ斜面に径20～30cm程度の礫を組んで配置している。礫表面は火熱を受けて赤変し、もろくボロボロする。北側の壁はかなりくずれており配置されていた礫が窯跡内に転落していたが、南側は比較的良く旧状を留めている。

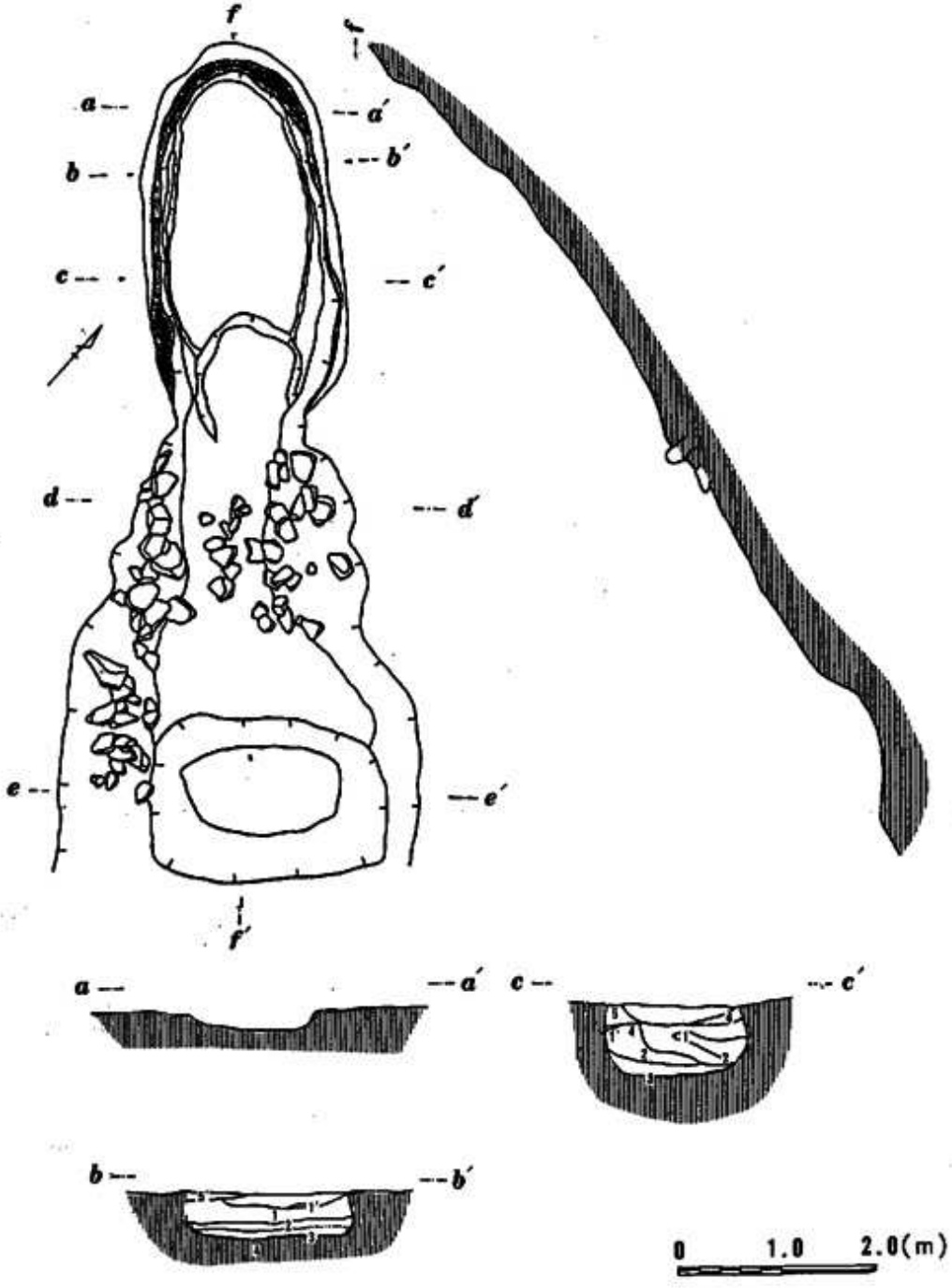
焚口部は大きく馬蹄形に開口し、これに接して2.3×1.6mの土坑状の落ち込みがある。この底面は火熱を受けた形跡は認められず焚口の前庭部的な施設と考えられる。

遺物は、焼成部床面からまとまって検出されたが、製品として放置されたものは概して少量であるが、焼成部床面に半割の坏などを底部を上にして置かれたものが多い。これは、特に焼成部上部に多く、焼台として使用されたものと思われる。その主をなすものは、坏の半割品であるが、中には甕の破片もあり、その断面には二次的な火熱を受けてガラス質の釉が吹き出したものも散見される。

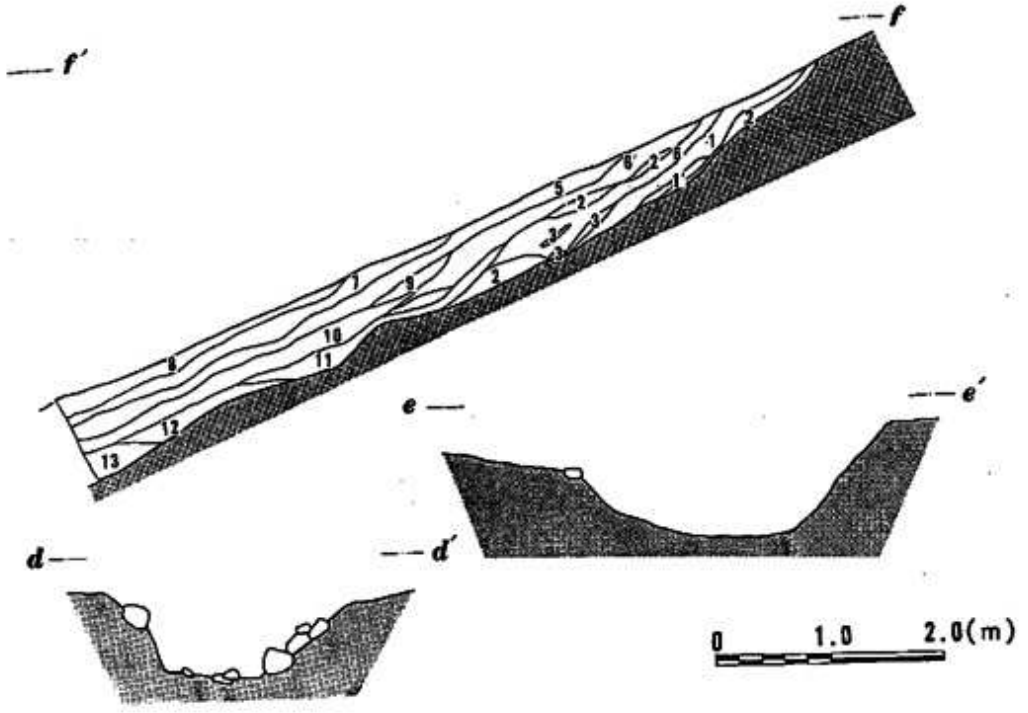
床面の勾配は、燃焼部と焼成部で変化し、燃焼部では28°の勾配を測る。その上部では、35°と急激に角度を増し焼成部へと移行する。焼成部では、29°の勾配を保ち、窯尻付近で傾斜を増し、そのまま煙り出しとなる。

完掘後、焼成部中央にサブトレンチを設定し、たちわりを行ったが、側壁の断面観察の所見によれば、窯構築後2回にわたる改修が行なわれた形跡がある。つまり、側壁は火熱を受けて堅く焼けた表面に再度、スサ入りの粘度を貼り付けて改修を行っており、その貼り付けた表面できれいに剥落する。その痕跡を2層にわたって認めることが出来た。改修時には、その内面に厚さ4～5cm位のスサ入り粘土を貼り付けて整形している。

灰原の調査は調査期間の関係上、ブルトーザーで削平された表面の広がりを確認したのみであった。それによれば、焚口を頂点として扇状に広がり、灰原中央部で幅8mを測る。端部は未確認である。



第5図　2号窯跡実測図



第6図　2号窯跡層序図、断面図

2．久保手1号窯跡（第8図）

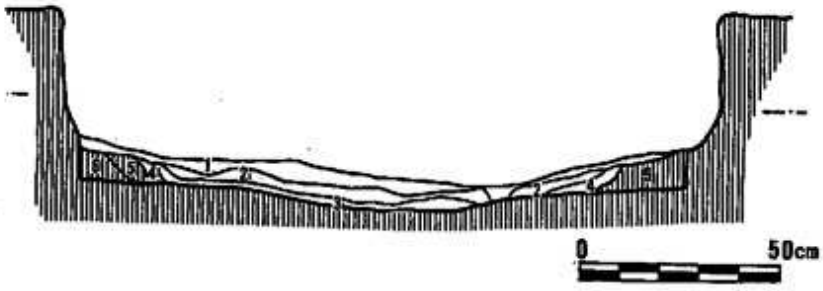
1号窯跡は前述した様に、2号窯跡焼成部床面の精査のため、たちわり溝を設定し切断したことによって検出されたものである。

断面の観察によれば、1層とした灰褐色土層（2号窯跡の床面で火熱を受けて比常に硬い）の下位に、炭化物を多量に含む2・3層があり、3層下位は火熱を受けて硬くしまっている。両サイドに4層（地山が火熱を受けて赤変した赤褐色土層）があり、これによって区画される窯跡であることを確認した。（第7図）

現存長は、3.6mを測り、最大幅は焼成部中央にあり1.4mを測る。窯尻付近は、2号窯跡の平面プランと一致する。焼成部と燃焼部を区別する特別の施設は認められず焚口付近に径1.0×1.3mの土坑状の落ち込みがある。この底面は火熱を受けた形跡はなく、前庭部的な平場を確保したものと考えられる。

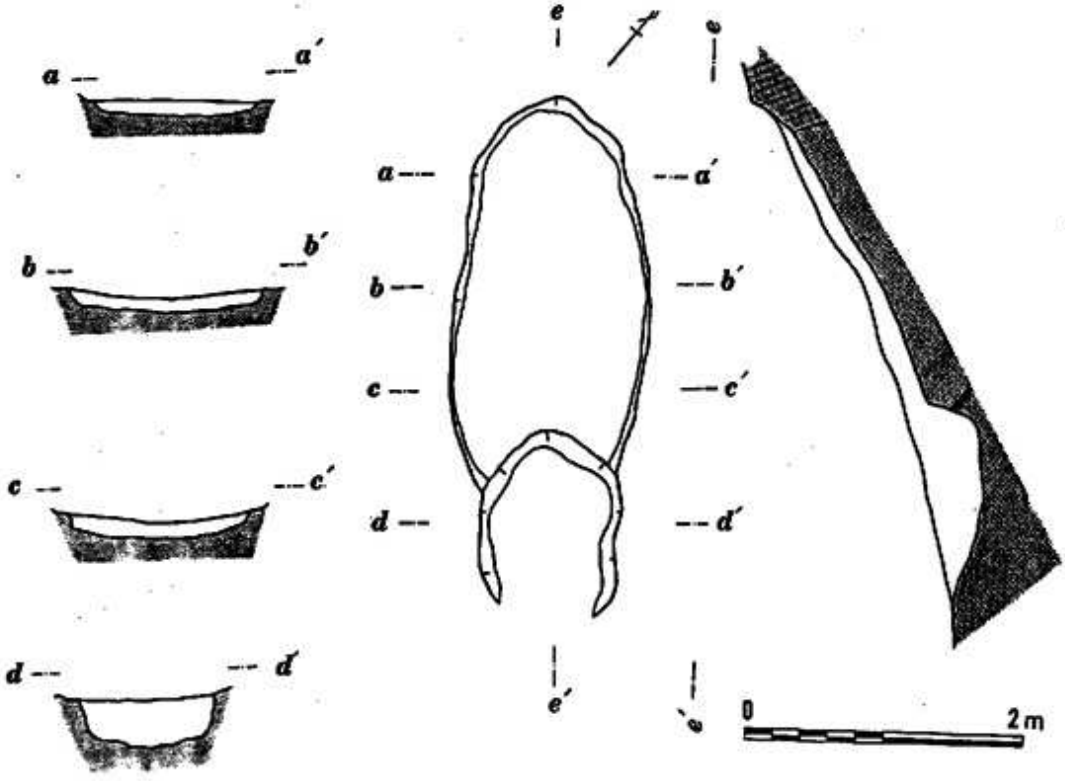
本窯跡では、2号窯跡と重複しているため、現存するのは窯底付近のみである。2号窯跡床面からの掘り込みは、深さ8～10cm程度である。主軸は2号窯跡とほぼ同一で、窯底の勾配は30°と強く、直線的に窯尻へと立ち上る。

遺物は焼成部の上部に多く、層厚5cm位の2・3層から出土している。2号窯跡床面と



第7図　1号窯跡層序図

の間にサンドされた状態で遺存し火熱を受けたために、器壁表面は暗い灰色を呈し、もろくなっている。製品として遺存しているものは少なく、多くは坏、甕、壺などの半欠品で、置台的に使用されたものが残ったものと考えられる。

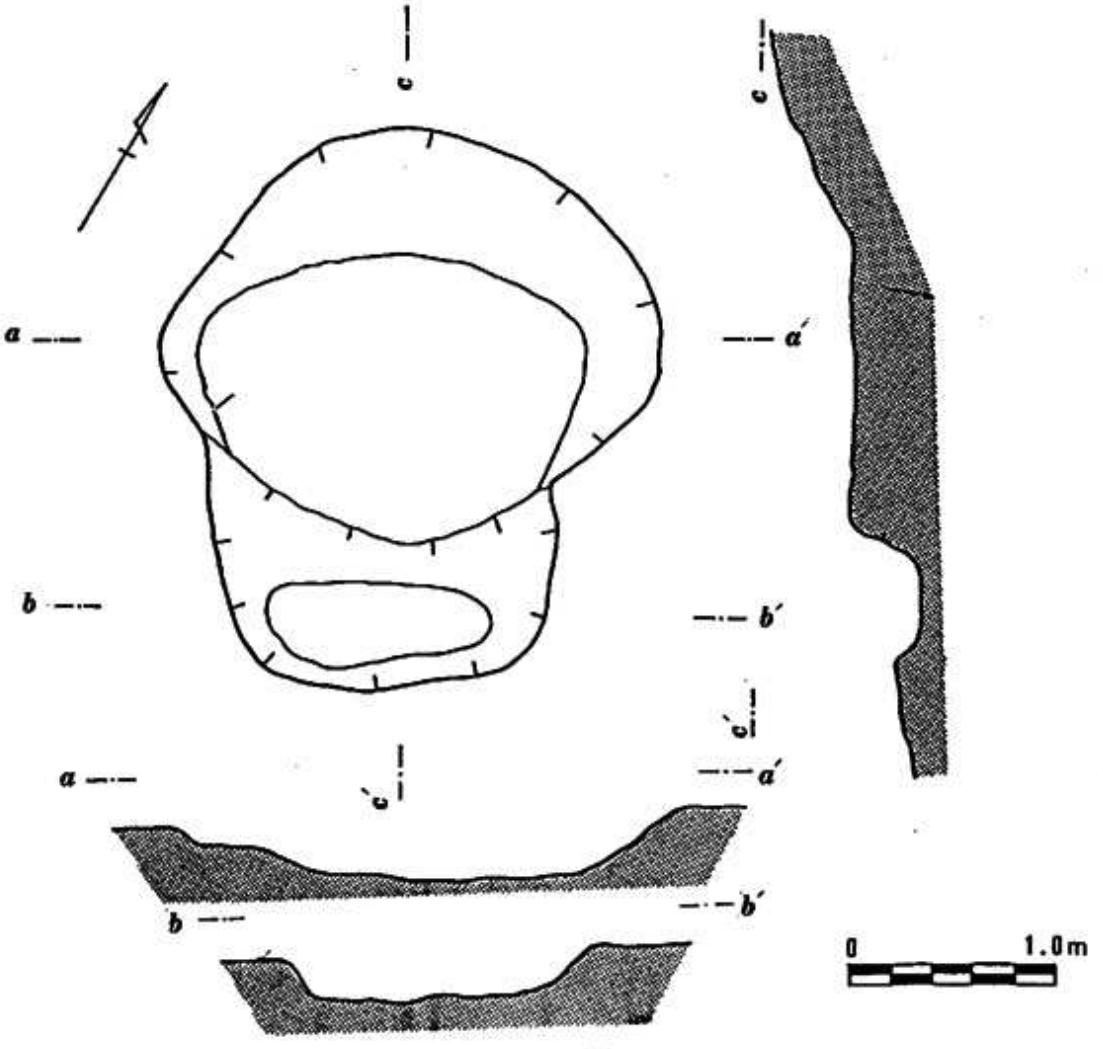


第8図　1号窯跡実測図

3．1号土坑（第9図）

2号窯跡の焼成部付近、南側に隣接して検出されたもので、平面プランは隋円形を呈する。この東側に接して、隅丸方形の落ち込みがある。両者の切り合いは認められない。大きさは2.7×2.2mを測り、底面は平坦で、深さは20cmと浅く皿状を呈する。覆土は多量の焼土と木炭片を含む単一土層で、底面は火熱を受けて赤変している。しかし、窯跡床面のように硬くしまった状態ではなく、軟かくサクサクしている。

遺物はかなり雑然とした状態で検出され、覆土内にびっしりつまった様な状況であった。あるものは、2号窯跡内出土の遺物と接合するものもある。



第9図　1号土坑実測図

Ⅳ　遺物について

遺物は各遺構から出土したが、その多くは２号窯跡からの出土である。器種としては、坏・高台坏・壺・甕・蓋等があり、その組合せは各遺構とも大差はない。しかし、須恵器底部の切り離し手法や再調整の有無、その位置などにより若干の相違が認められる。

上記の点を考慮し、各器種を細分すると、坏を８類、高台坏を４類、壺を２類、甕を３類、蓋を２類にそれぞれ分類することができる。（第１表）・（第10図）

坏では、底部の切り離しに回転糸切り手法によるものと、ヘラ切り手法によるものとに大別される。前者には、手持ヘラ削りの再調整を併なうＩ－１類、回転ヘラ削りの再調整を併なうＩ－２類、無調整のＩ－３類、及び、なでが底部周縁に施され丸底風を呈するＩ－４類に細別される。後者は、底部周縁にのみなで調整を併ない、底部から体部の立上りの境界が不明瞭な丸底風を呈するＩ－5ｂ類、及び、手持ヘラ削りの再調整を併なうＩ－６類、無調整のＩ－７類に細別される。また、Ｉ－5ａ類として分類したものは、なで調整が底部全体と体部の立上り周縁に施されたもので、丸底風を呈し底部の切り離し手法はなで消されて不明なものである。坏では、器高が低く、概して口径・底径が大きい。形態的には、体部の立上りはゆるく直線的に立上り外反する。

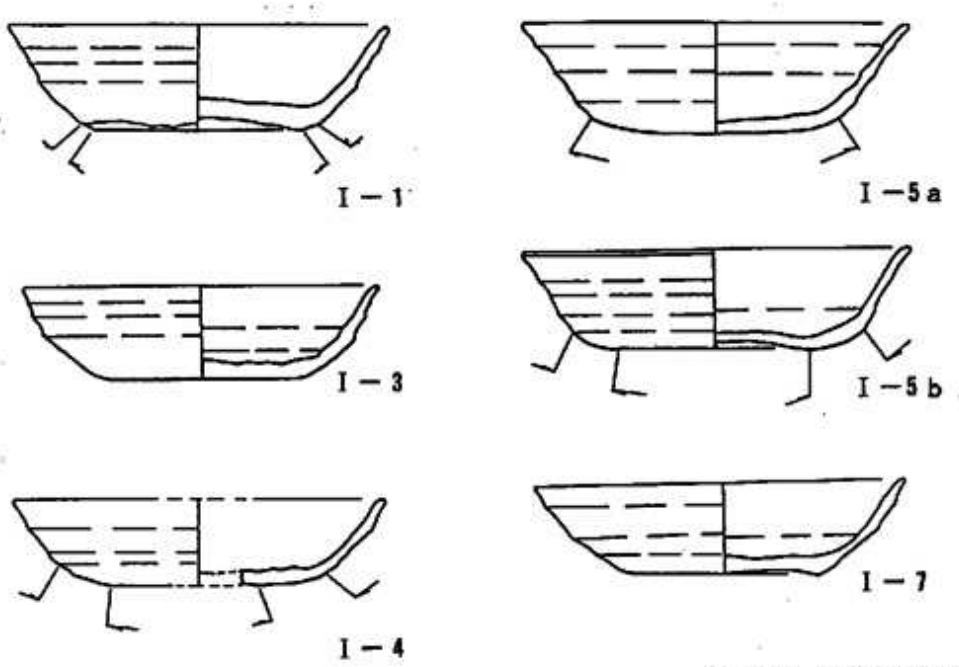
高台坏は破片が多く、その器形全体を推定できるものは少なかった。概して、器高に比して口径・底径が大きく、底部の切り離しには糸切りとヘラ切り手法による二者がある。また、高台が高く稜碗のような形態を示すものもあるが、いずれも高台部の破片で判然としない。

壺は、いずれも体部、及び口縁部の破片のみで器形全体を推定できるものはない。口縁部の形態から、長頸の壺（Ⅲ－１類）と短頸の直立する口縁部がつくもの（Ⅲ－２類）に大別される。

甕として分類できる遺物は比較的多いが、いずれも破片である。その断面には、ガラス質の釉が付着しているものが多く、二次焼成を受けている。胴部表面には平行状の叩き目、内面に円形、あるいは青海波文状のアテ痕が認められる。口縁部は大きく外反し、大型甕（Ⅳ－１類）の頸部、口唇部に波状のヘラ描き文をもつものもある。

蓋は２類に分類したが、つまみ部の形態には、宝珠形つまみを有する器形も若干認められる。しかし破片が多く器形全体を知り得るものは多くはない。

他の製品としては、円面硯の小破片が出土している。



第10図　須恵器分類図

第1表 須恵器分類表

器種	区分	器形	底部形態	切り離し	外面調整	内面調整	再調整	摘要
坏(I)	1	直線的に外反	平底	糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	手持ヘラ削り	
	2	同上	同上	同上	同上	同上	回転ヘラ削り	
	3	同上	同上	同上	同上	同上	――	
	4	同上	同上	同上	同上	同上	ナデ	
	5a	同上	同上	不明	同上	同上	同上	
	5b	同上	同上	ヘラ切	同上	同上	同上	
	6	同上	同上	同上	同上	同上	手持ヘラ削り	
	7	同上	同上	同上	同上	同上	――	
	8	内湾ぎみに立上り蓋受部で屈曲	丸底	不明	同上	同上	回転ヘラ削り	
高台坏(II)	1	直線的に外反	平底	糸切	ロクロナデ	ロクロナデ	――	
	2	同上	同上	同上	同上	同上	回転ヘラ削り	
	3	同上	同上	ヘラ切	同上	同上	――	
	4	同上	同上	同上	同上	同上	回転ヘラ削り	
壺(III)	1	長頸壺	平底		ロクロナデ	ロクロナデ	――	
	2	短頸壺	同上		同上	同上	――	
甕(IV)	1	大型甕			平行状叩き目	円形アテ痕		
	2	小型甕			同上	同上		
	3	鉢形			ロクロナデ	ロクロナデ		
蓋(V)	1	天井部からなだらかに口縁部に至る			ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ削り	
	2	口縁部クサビ状			同上	同上	同上	

1．久保手２号窯跡出土の遺物（第11図～第14図）

２号窯跡は、現存長8.2ｍを測り、焼成部・燃焼部・焚口部とも良好に遺存していた。遺物は、燃焼部・焚口部の覆土からも多く出土しているが、大部分は焼成部床面から集中して検出された。器種としては坏が最も多く、燃焼部覆土から円面硯の小破片が２点出土している。

ここでは、焼成部床面出土の一括遺物を中心として述べることにする。各器種は前述した分類基準に従って細分すると第２表の様になる。なお、遺物点数は個体数ではなく破片数であることを付記しておく。（第２表）

坏　（第11図１～21、第12図22～40、第13図41～52）

図化し得たのは52例である。第２表に示したように、主体を占めるのはＩ－７類である。

Ｉ－７類（第11図１～21、第12図22～36）は、ヘラ切り無調整の坏である。底部から体部の立上り付近が明瞭で、体部は直線的に立上る。概して、器高が低く、底径・口径が大きく、口径は14cm前後におさまるものが多い。

Ｉ－５ａ類（第12図37～39）は、底部全体と体部下位の立上り付近にかけて、なで調整が認められる。一見、丸底状を呈し、底部の切り離しは、不定方向のなでによってすり消されており不明である。

Ｉ－５ｂ類（第13図41～49）はヘラ切り手法の坏で、底部周縁から体部の立上り付近にのみなで調整が認められる。

Ｉ－３類（第13図50）として分類した坏は、底部の切り離しが、糸切り手法、無調整の坏で、３点のみの出土である。図化し得たのは１例のみで底部の破片である。底部中央がくぼみ、若干上げ底状を呈する。

Ｉ－８類（第13図51、52）は、所謂、蓋坏の坏部の様な器形を呈するもので３点出土している。底部は丸底で内湾しながら立上った体部は、蓋受部で〝くの字〟状に屈曲し、口縁部はやや内傾ぎみに直立する。底部周縁に回転ヘラ削り調整が施されている。蓋受部の突起は、ほとんど認められず、52では若干残しているがかなり退化している。

高台坏　（第13図53、54）

図化し得たのは２例のみである。いずれも底部の破片で器形全体を把握できるものはない。53、54とも、底部の切り離しがヘラ切り手法によるものである。

甕　（第14図55～61）

すべて胴部、及び口縁部の破片で器形全体を知り得るものはない。55～57は大型甕（Ⅳ－１類）の口縁部破片で、頸部から口縁部にかけて大きく外反する。55、57には、ヘラ描きの波状文がある。胴部には、表面に平行状の叩き目、内面に青海波文状のアテ痕が施さ

れている。58は、小形甕（Ⅳ－２類）の破片である。

壺

体部の小破片が２点のみ出土したが、いかなる器形を呈するかは不明である。

蓋

図化し得るものは検出されなかった。口縁部が鋭く、くさび状を呈するもの（Ⅴ－２類）のみである。

２．久保手１号窯跡出土の遺物（第15図）

１号窯跡は、前述したように２号窯跡と重複して、その下位に検出されたもので、窯底付近のみを遺存する。出土した遺物は、総量で85点と少ないが、坏底部の切り離し技法、及び再調整の有無など、２号窯跡出土の遺物とは若干の違いが認められる。前述した分類基準に従って細分すると第２表のようになる。（第２表）

坏　（第15図１～８）

図化し得たのは８例で、いずれも底部から体部の立上り付近の破片で、器形全体を把握できるものはない。第15図１～４は、底部の切り離しが糸切り手法、無調整の坏である。（Ⅰ－３類）第15図５は糸切り手法で底部から体部の立上り付近に手持ヘラ削りを併なう。（Ⅰ－１類）第15図６、７はヘラ切り無調整の坏である。（Ⅰ－７類）第15図８は、比較的小形の坏で器高も低いが、１号窯跡出土の坏は、概して底径が大きく、器高の低い大形の坏が多いようである。底部は、中央部で若干くぼみ、上げ底状を呈するものも散見される。また、底部に〝メ・ノ〟の様な窯印を残すものも認められる。

壺　（第15図11、12）

第15図11は、長頸の壺で口頸部の破片である。口径は約９cmを測り、比較的大きい。直立する頸部に球形の胴部がつくものと考えられる。表面に釉の吹き出しが認められる。12は、短頸の大形壺で、口縁部から胴部にかけての破片である。

甕　（第15図10）

いずれも、口縁部、胴部の破片である。大形の甕には表面に平行状の叩き目、内面に円形あるいは青海波文状のアテ痕をもつものである。第15図10は大形甕（Ⅳ－１類）の口縁部破片で、頸部ですぼまり口縁部は大きく外反する。波状のヘラ描き文が施されている。

３．久保手１号土坑出土の遺物（第16図）

１号土坑は、２号窯跡焼成部の南側に隣接して検出された。遺物は土坑覆土にびっしりとつまった様な状態で検出されたが細片が多い。遺構底面に遺存しているものは少なかっ

った。しかし、器種としては2号窯跡の出土遺物と同じで、量的にも多い。前述した分類基準に従って細分すると第2表のようになる。

坏　（第16図1～11）

図化し得たのは11例である。底部の切り離し技法には、ヘラ切り手法によるものと、糸切り手法によるものとに大別されるが、出土状況において両者を区別する特別の根拠は認められなかった。また、底部に窯印をもつものは、糸切り手法の坏に多く認められ、1号窯跡の出土遺物と共通する。

Ⅰ－1類（第16図7、8）は、糸切り手法で体部下位に手持ヘラ削りを併なうもので、2例を図化し得た。8は底部の破片であるが、7はほぼ全様を知り得る。体部はその下位でやや屈曲し、直線的に外反する。比較的小形の坏である。

Ⅰ－3類（第16図1～3）は、糸切り無調整の坏で、本遺構から出土した坏のうち、その主体を占める。底部に、ヘラ状の工具でひっかいたような窯印をもつものが7例ほどある。図化し得たのは3例のみで、細片となっているものが多い。

Ⅰ－4類（第16図4～6）として分類したのは、糸切りで底部周縁から体部の立上り付近に、なで調整が認められる。丸底風を呈し、口径・底径とも大きく、大形の坏である。

Ⅰ－5b類（第16図11）は、ヘラ切りで丸底風を呈する坏である。図化し得たのは1例のみであるが、窯印をもつものが2例あった。

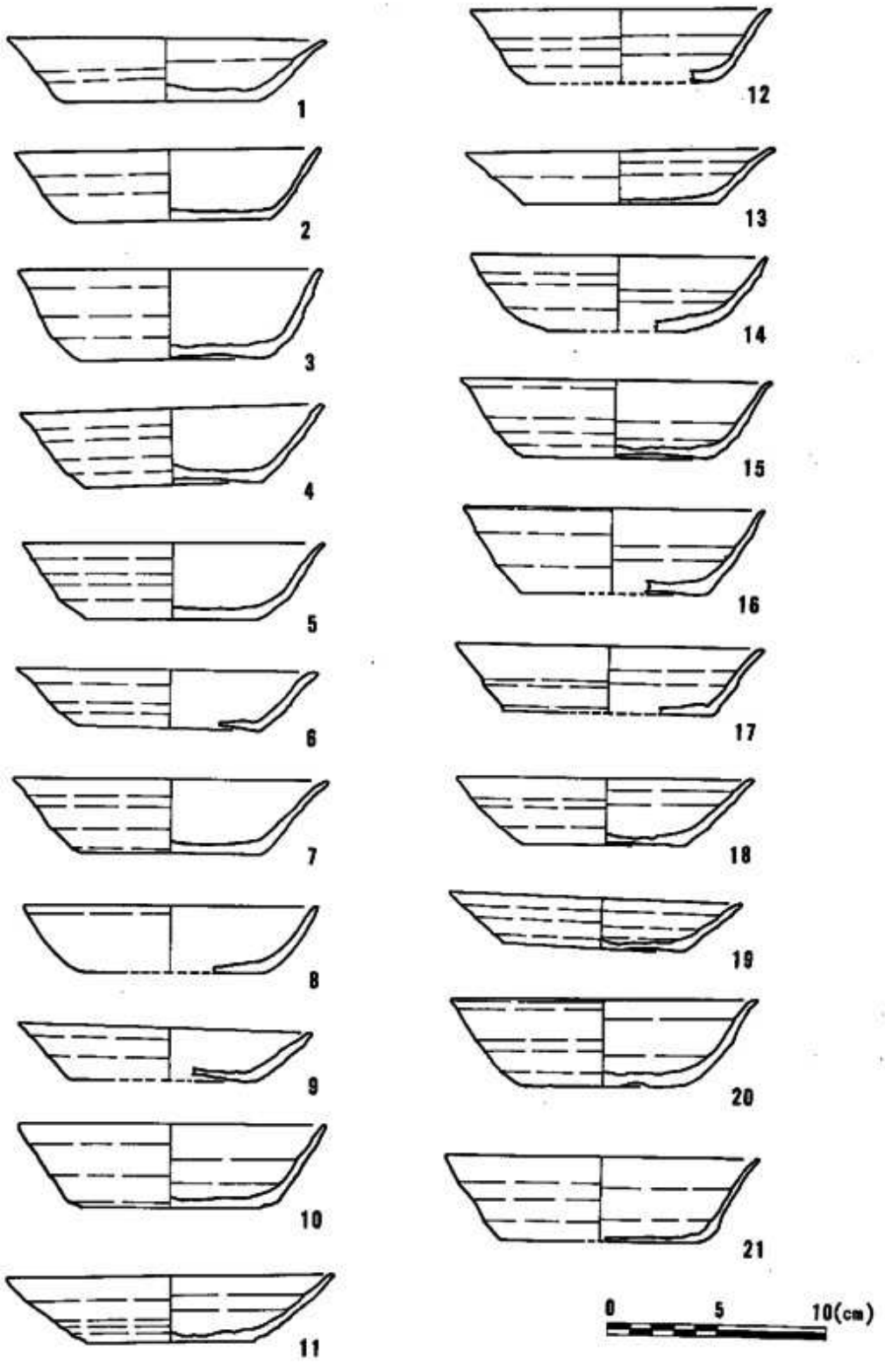
Ⅰ－7類（第16図9、10）は、ヘラ切り無調整の坏で、9は小形の坏である。

高台坏　（第16図12～15）

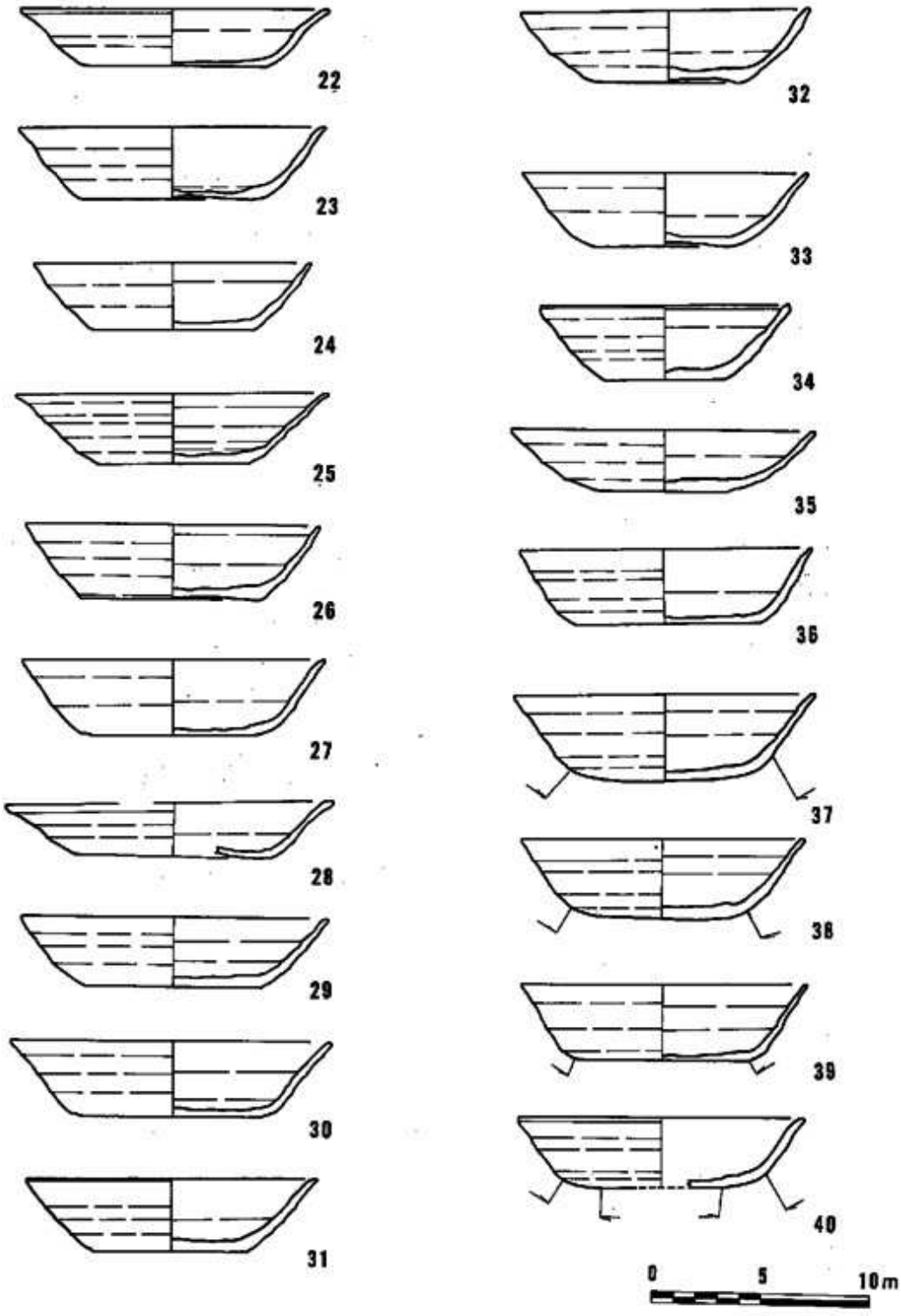
図化し得たのは4例である。12、13は糸切り手法の坏（Ⅱ－1類）である。13は、低い高台に大形の坏がつくものである。体部の立上りは急で器壁も比較的厚い。14はヘラ切り無調整（Ⅱ－3類）で、15はヘラ切りで、体部の下位に回転ヘラ削り調整を併なう（Ⅱ－4類）ものである。

蓋　（第16図16～18）

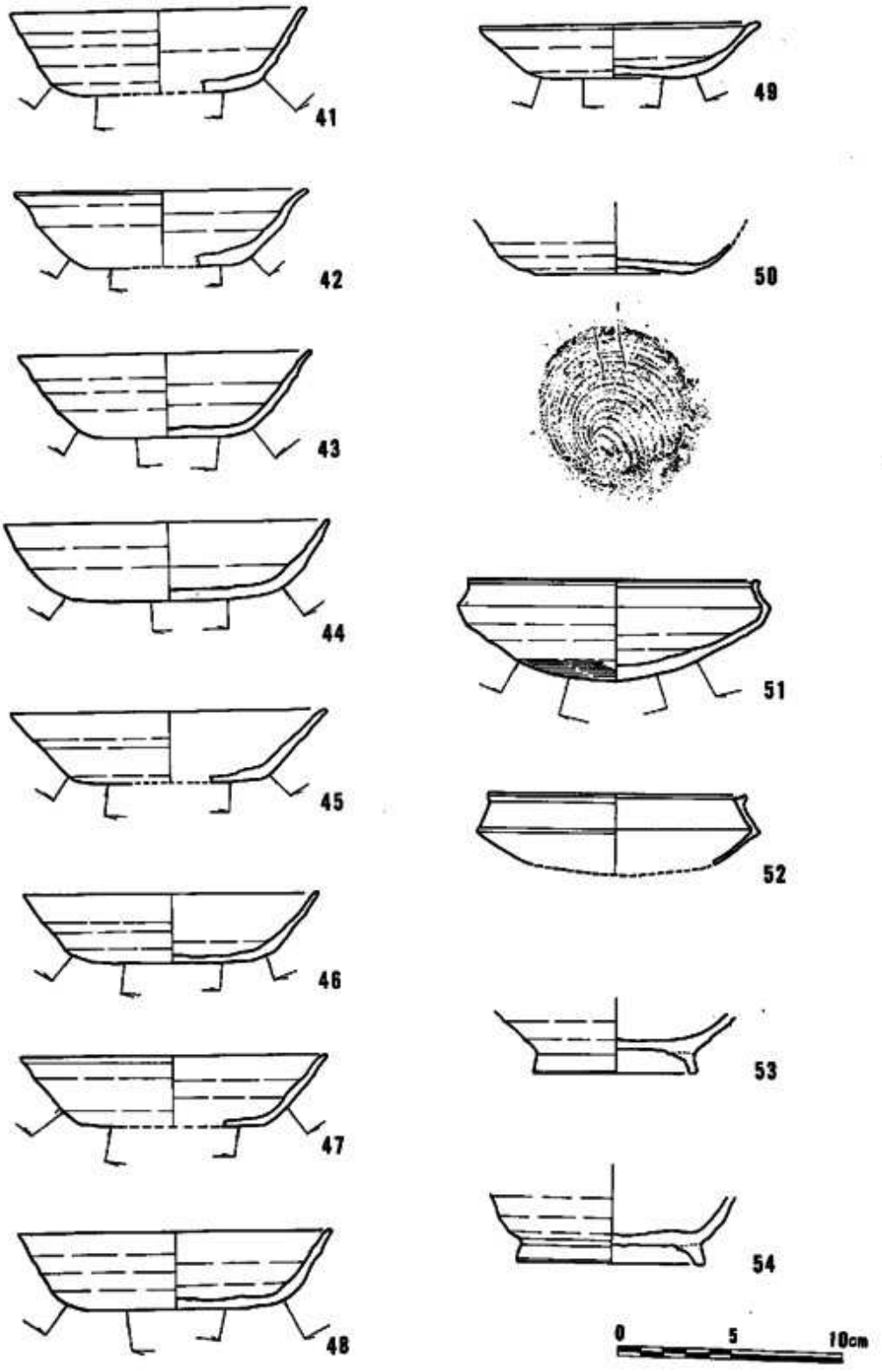
3例を図化し得た。肩部には、いずれも回転ヘラ削り調整を併なうが、16は天井部からなだらかに口縁部に至るが、17、18では肩部で稜を形成し、口縁部は鋭く、くさび状を呈する。16はⅤ－1類、17、18はⅤ－2類として分類できる。



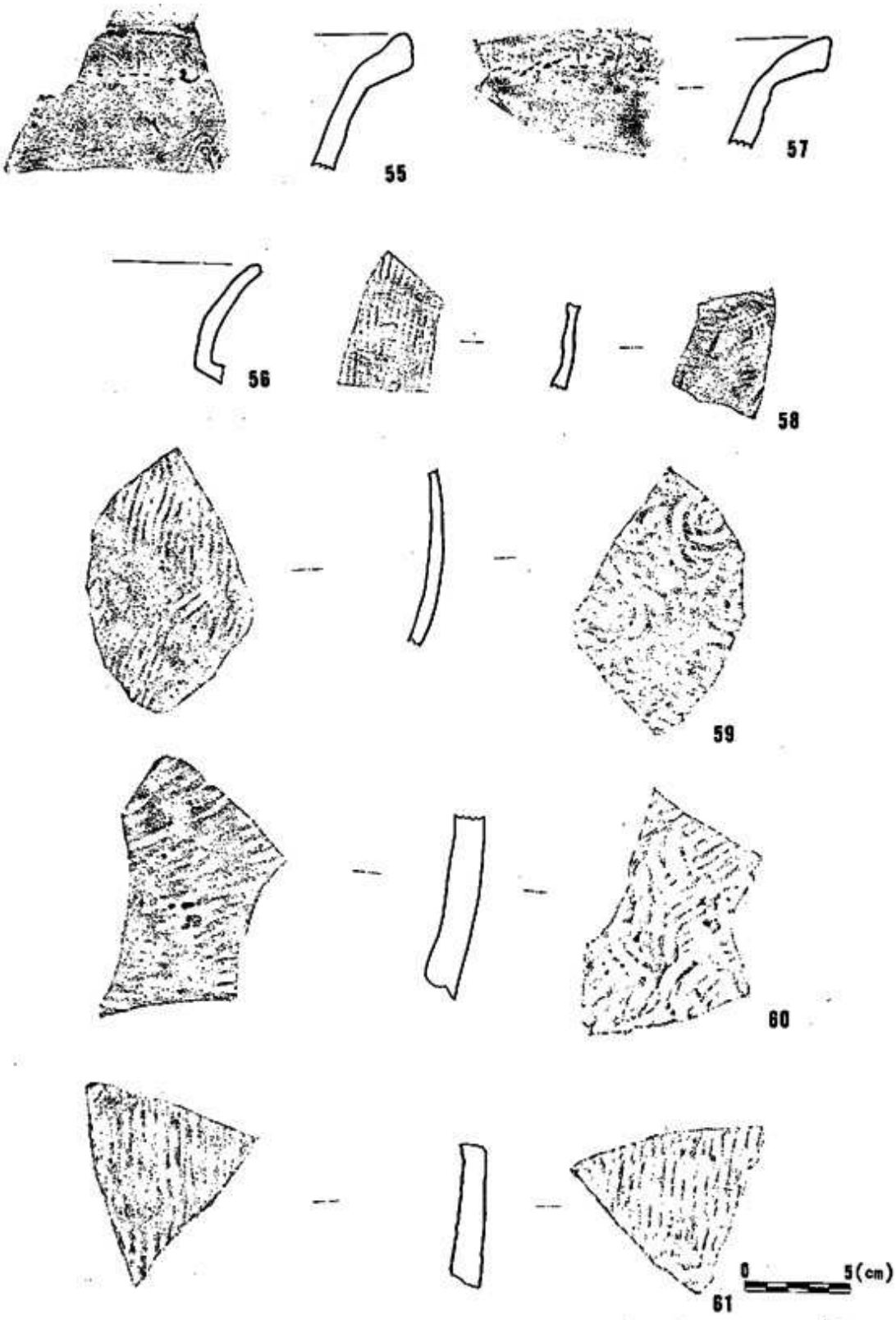
第11図　2号窯跡出土遺物実測図(1)



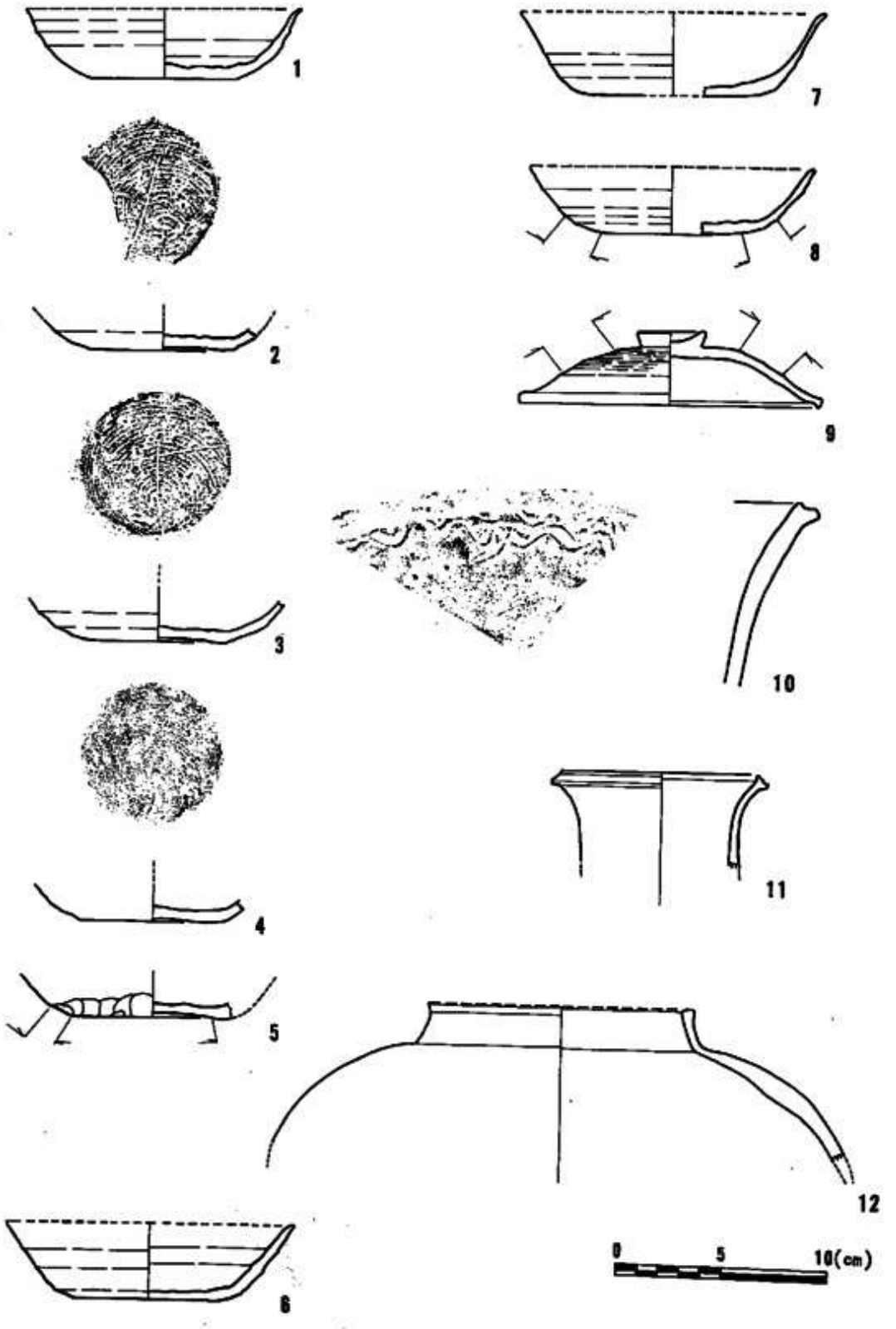
第12図　2号窯跡出土遺物実測図(2)



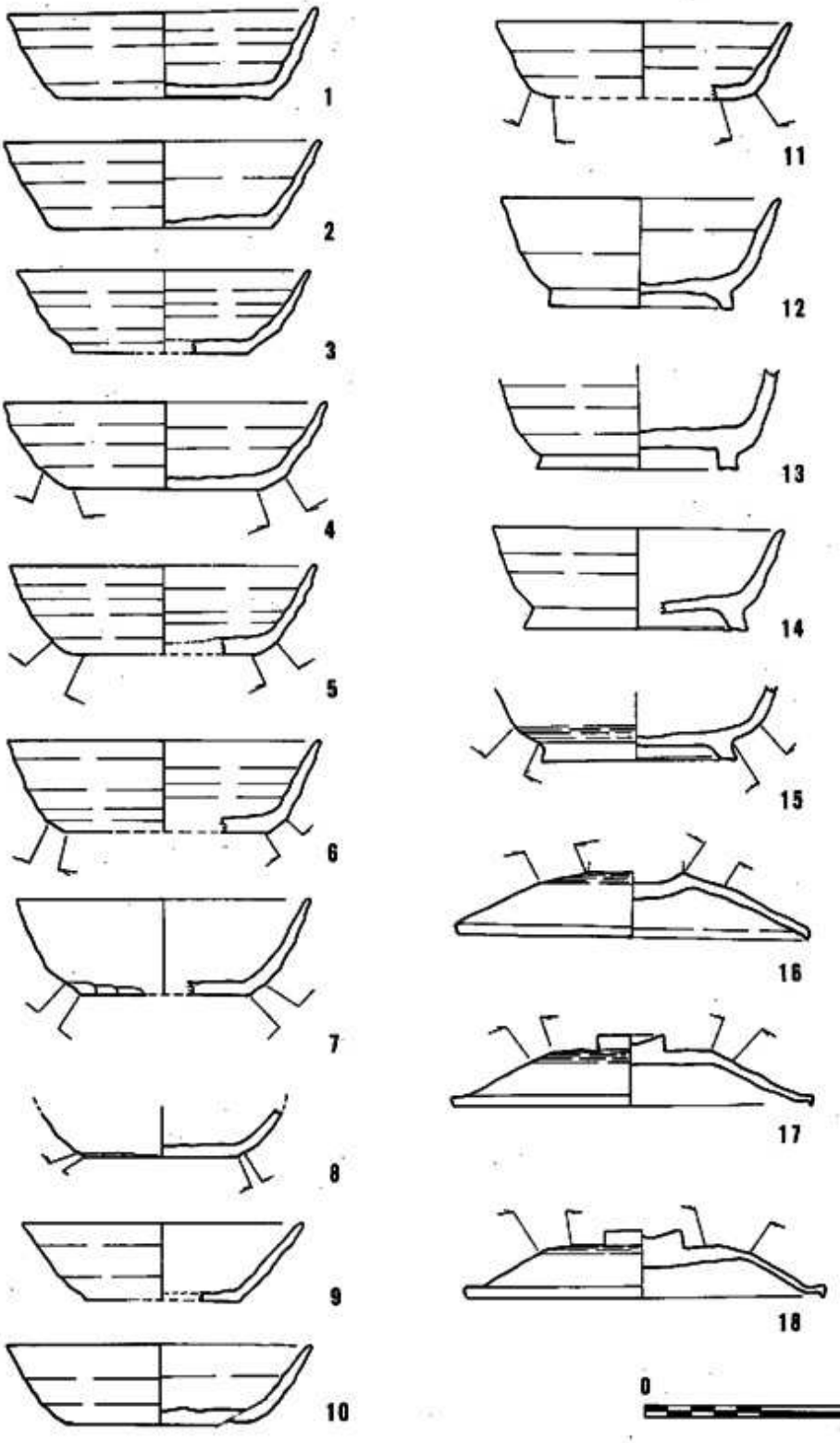
第13図　2号竈跡出土遺物実測図(3)



第14図　2号窯跡出土遺物実測図(4)



第15図　1号窯跡出土遺物



第16図　1号土坑出土遺物

第2表　各遺構出土遺物分類表

器種	区分	2号窯跡焼成部床面		1号窯跡焼成部床面		1号土坑	
		員数	摘要	員数	摘要	員数	摘要
坏（I）	1	−		1		16	窯印　1点
	2	−		−		3	
	3	3		11	窯印　2点	94	窯印　7点
	4	−		1		5	
	5a	32		−		−	
	5b	66		−		22	窯印　2点
	6	−		1	窯印　1点	2	
	7	173		4		16	
	8	3		−		−	
高台坏（II）	1	−		−		10	
	2	1		1		−	
	3	3		−		6	
	4	−		−		2	
壺（III）	1	−		1	1号土坑出土遺物と接合	1	2号窯跡出土遺物と接合
	2	−		1		2	
甕（IV）	1	45		17		31	
	2	11		6		10	
	3	−		−		−	
蓋（V）	1	−		−		9	
	2	6		2		10	
備考		I、II体部破片（分類不能）321点 III体部破片（分類不能）　2点		I、II体部破片（分類不能）39点		I、II体部破片（分類不能）18点	

第3表　上山西部丘陵地域窯跡群地名表

番号	遺跡名	所在地	立地	出土遺物	備考
1	オサヤズ前窯跡	山形市大字松原字峯岸	山麓	平瓦	
2	オサヤズ窯跡	同上	同上	同上	
3	長者屋敷窯跡	山形市小松原字石原坂	段丘斜面	須恵器	
4	小松原窯跡	同上	同上	須恵器、瓦、硯	2地点有り
5	久保手窯跡	上山市四ツ谷、地蔵堂	山麓	須恵器、硯	
6	熊野堂窯跡	山形市谷柏、熊野堂	谷頭斜面	須恵器	
7	四ツ谷窯跡	上山市弁天	段丘斜面	瓦、須恵器	
8	三千刈窯跡	上山市四ツ谷、三千刈	山麓	須恵器、瓦	7地点有り
9	薬山窯跡	上山市高松薬山	同上	須恵器	

V　各窯跡群について

山形盆地南西部から上山市西部にかけての当該地域には、今回、調査を行った久保手窯跡を含めて９ヶ所の窯跡が群在している。(第３表) このうち調査が行なわれたのは、上山市葉山窯跡、久保手窯跡、山形市小松原窯跡等で、数基の窯跡が検出されている。上山市四ツ谷、三千刈窯跡でも、宅地造成に併なう予備的な調査が行なわれているが[(2)]、詳細については不明の点が多い。ここでは、表採資料を含め、これまで管見にふれた遺物を中心に述べることにする。

１．オサヤズ前、オサヤズ窯跡（第１図１、２）

(a)　位置及び経過

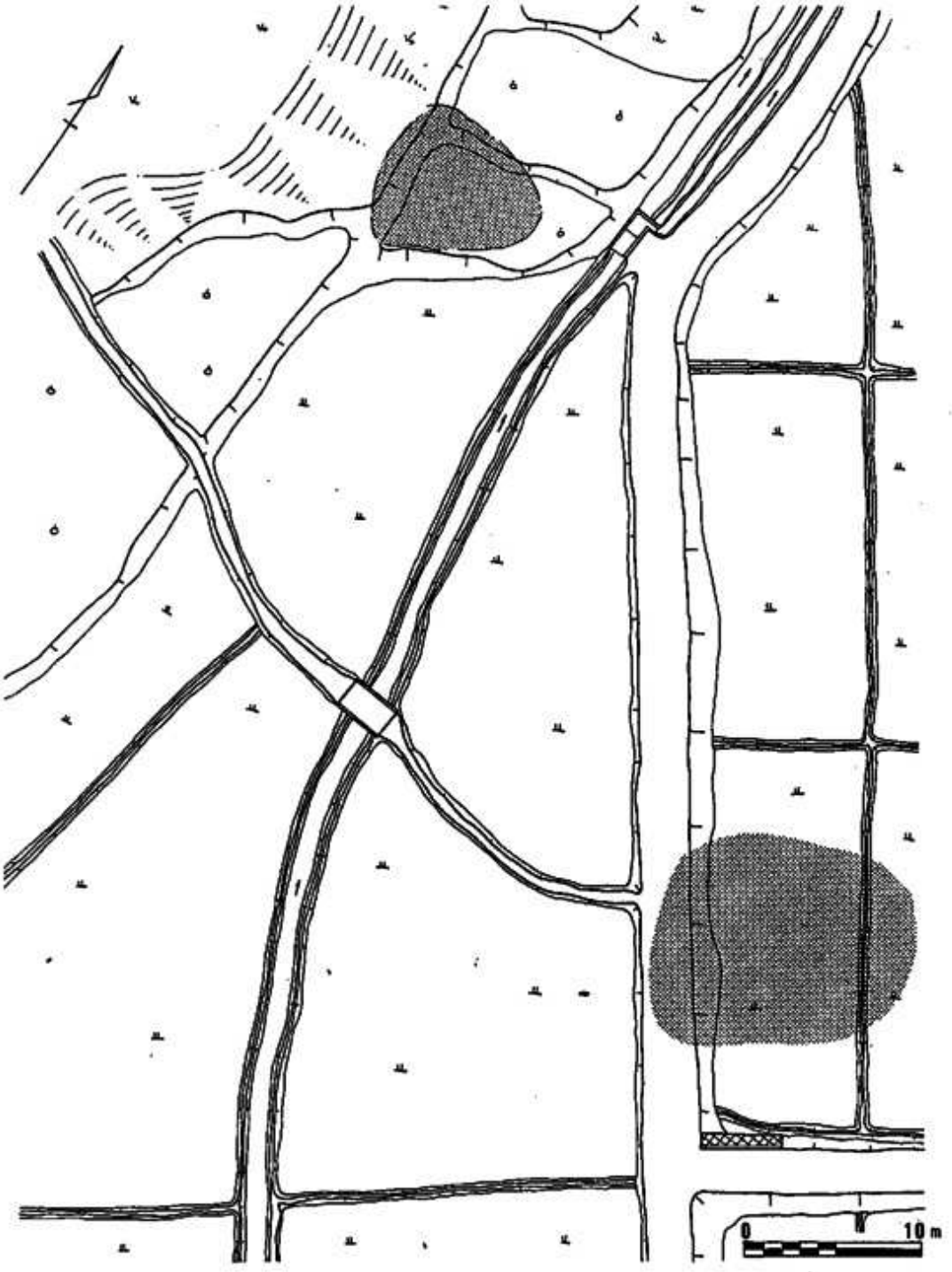
山形盆地の南西縁、山形市大字松原字峯岸に所在する。盆地の平野部から丘陵へ移行する傾斜変換線付近にあたる。山形市松原から分岐して西進すると丘陵の突端に愛染神社があるが、羽州街道が整備される以前は、現在の奥羽本線の西側ぞいに南進し、愛染神社付近より丘陵上に登り上山市四ツ谷へ至る旧道があったということで、ここに賽の神を祀り、付近一帯を〝オサヤズ〟と呼称している。

窯跡は二地点あり、オサヤズ西方の水田中と、さらにその西方約30ｍの山麓にある。前者をオサヤズ前、後者をオサヤズ窯跡と称するが、位置関係からみて同一支群の窯跡と考えられる。オサヤズ前窯跡は、当地域の耕地整理が行なわれた昭和32年頃の発見で工事に併なって多量の瓦片が出土し、高瀬助次郎氏らによって窯跡と確認されたものである。窯跡が所在する付近は、農道のＴ字路にあたり東西に走る農道を境として、両側水田面の比高が約２ｍ程あり、原地形は段丘状のゆるい斜面をなしていたものと考えられる。明確な遺構は未確認であるが、瓦片のみが出土し須恵器は認められなかったという事である。

オサヤズ窯跡は、さらにその西方の丘陵山麓にあり、現地形は段々状の畑になっている。約10ｍ四方程度の範囲に瓦片が散布している。(第17図)

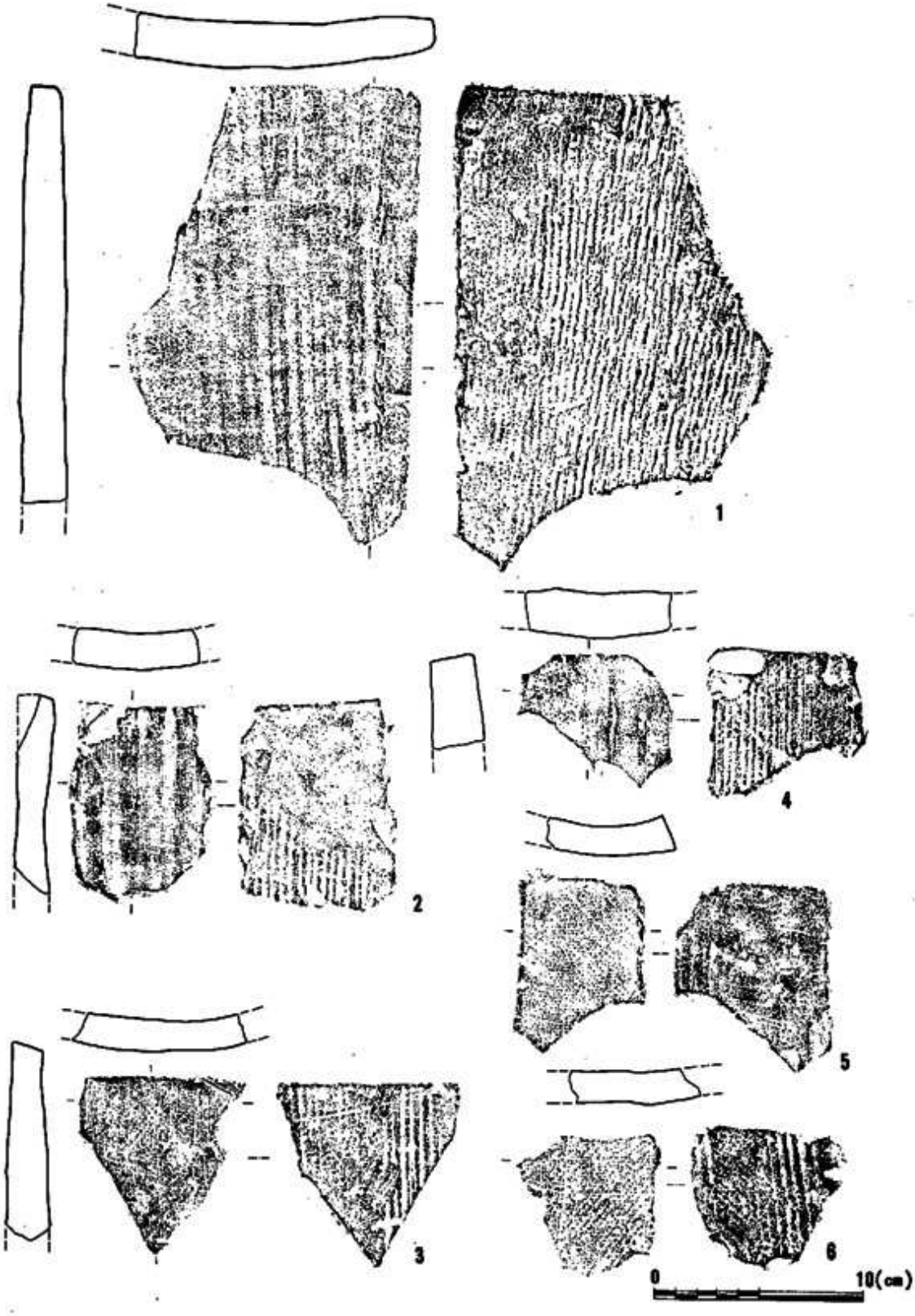
(b)　出土遺物　（第18図１～６、第19図７～12）

当該窯跡からは瓦片のみが出土している。オサヤズ前窯跡の出土遺物は、工事の際、農道造成のため運び込まれ埋設されたということで、現在、管見にふれるのはオサヤズ窯跡から表採された遺物である。いずれも、平瓦だけで、丸瓦・軒瓦等は出土していない。出土した平瓦は、いずれも破片で、その大きさは判然としないが、第18図１などから推定す

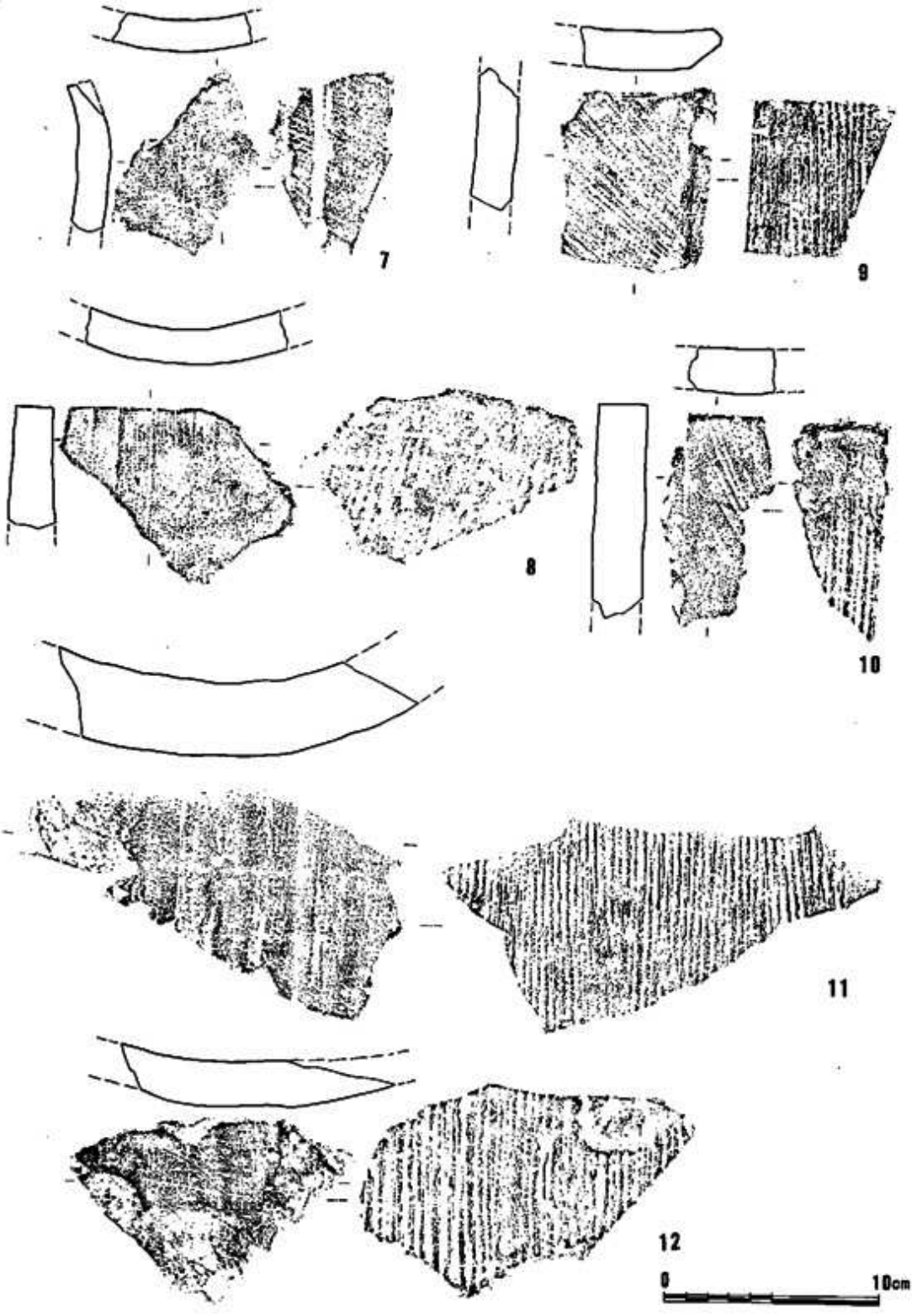


第17図　オサヤズ前・オサヤズ窯跡平面図

れば、30×25cm程度の大きさであろう。厚さは、1.5～2cm位であるが、第19図11は、3.5cmと厚い。いずれも凹面（表面）に布目痕、凸面（裏面）に縄目文をもつ。作瓦技術には、平瓦の場合、桶巻きづくりによるものと、一枚づくりによるものとの両者がある。当該窯



第18図　オサヤズ窯跡出土遺物(1)



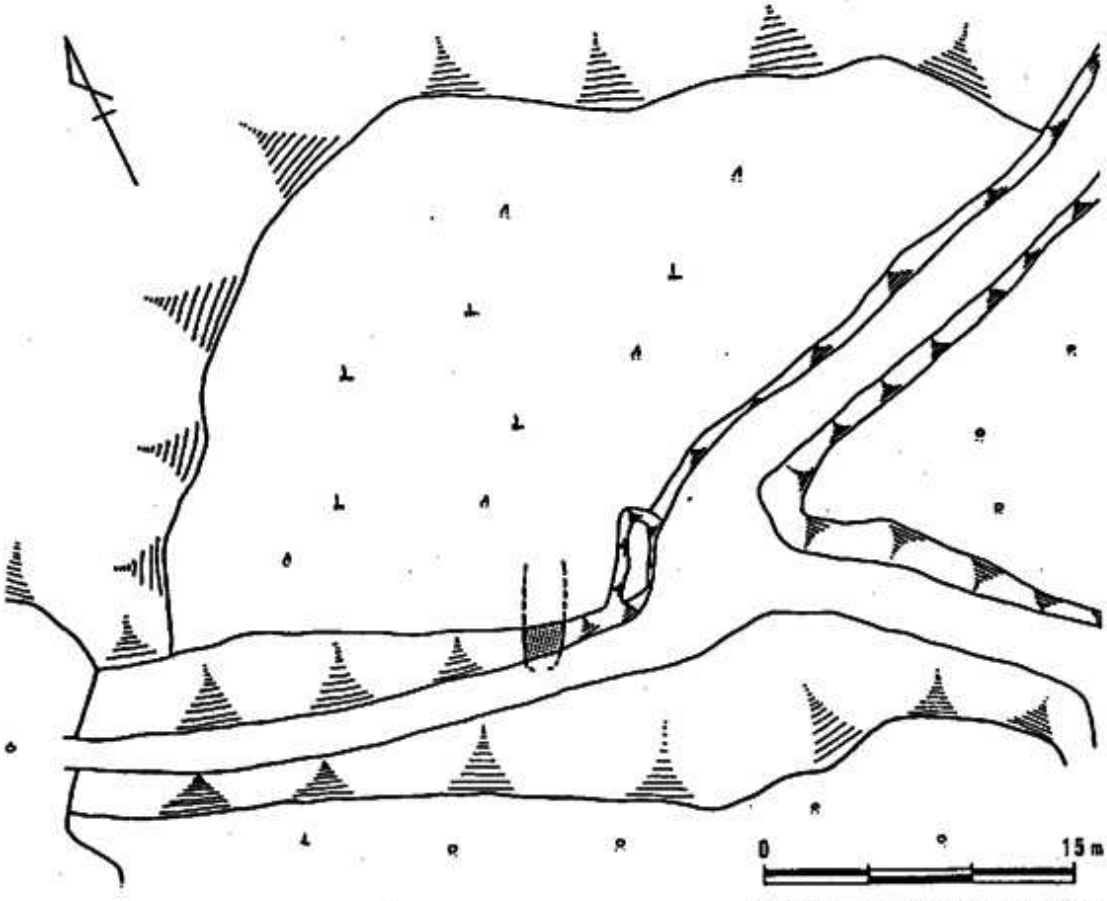
第19図　オサヤズ窯跡出土遺物(2)

跡の平瓦は、破片であることもあって判然としないが、第19図９、10の凹面に粘土板の糸切り痕が認められる。また、第18図２、第19図８、11の凹面に模骨痕と思われるものが残っており、これらは、桶巻きづくりによって作瓦されたものと考えられる。模骨の幅は、1.5cm程度である。色調は暗い青灰色を呈し、一部赤褐色を呈するものがある。

２．長者屋敷窯跡（第１図３）

山形市大字松原字石原坂に所在する。現在は杉林になっている。小松原は、丘陵上の平坦地に点在する集落で、この平坦地を通称〝下の原〟と称している。この平坦面の東辺は、上山市久保手付近から流下する不動沢の渓谷に接している。当該窯跡は、この不動沢の右岸段丘上の斜面に立地しており、沢に向かって落ち込む西面する緩斜面をなしている。後述する小松原窯跡は、不動沢の左岸にあり、相対峙した位置関係にある。

遺跡は、昭和26年頃、土蔵建設のための採土作業中、偶然に発見されたもので、その際多量の須恵器が出土したという。その後、昭和46年３月に確認調査が行なわれた。(3) その所見によれば、農道の切土法面に窯跡のセクションを確認することができた。現存幅は、約



第20図　長者屋敷窯跡平面図

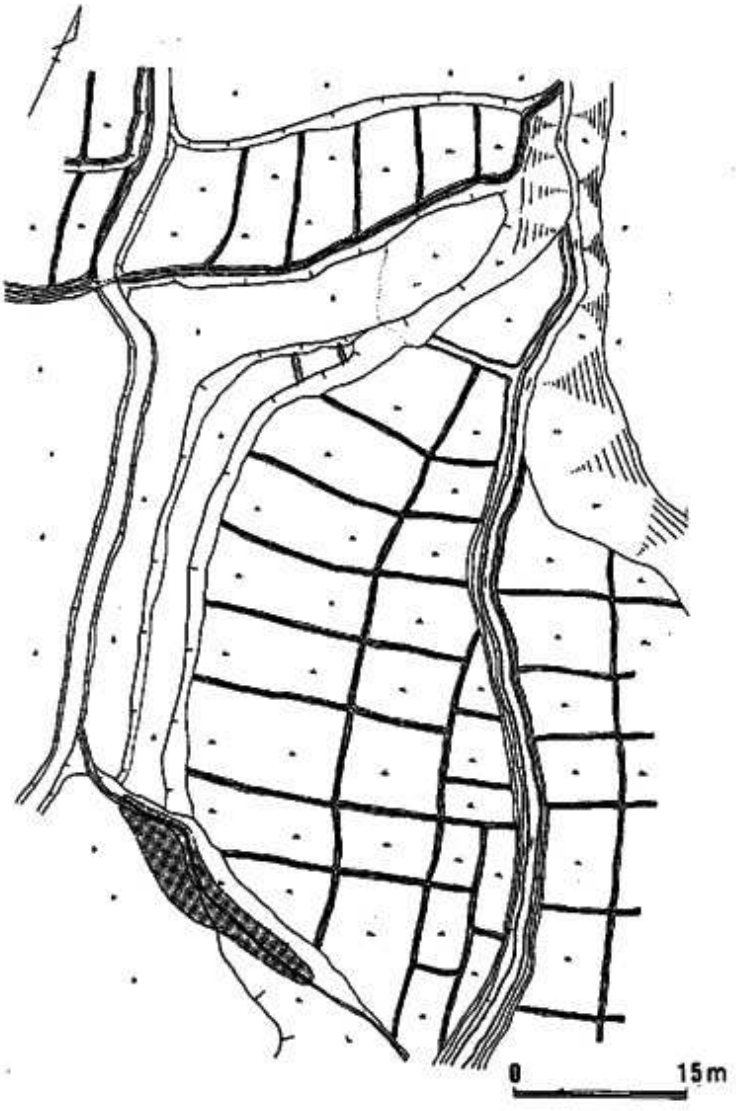
0.9mを測り、焼成部先端の窯尻付近と考えられる。窯本体は、発見時に破壊されており窯尻付近のみが農道につっこむような状態で遺存している。(第20図)

遺物は、大形甕(Ⅳ－1類)の破片が若干検出されたのみで、他の器種は検出されなかった。甕の胴部破片には、表面に平行状叩き目、内面に円形のアテ痕が認められる。

3．小松原窯跡(第1図4)

(a) 位置、及び経過

山形市小松原、石原坂に所在する。前述した長者屋敷窯跡の対岸、不動沢左岸の段丘斜面に立地する。河底の水田面と段丘上面との比高は、約4mを測る。不動沢は、小河川ながら深い谷を侵んでいるが、窯跡が所在する付近は谷が比較的ひらけ、対岸へ渡河する小径がある。遺跡は、北側にのびる段丘上と、小径にそった南側斜面の2地点がある。便宜上、前者をA地点、後者をB地点と呼称する。(第21図)



第21図　小松原窯跡平面図

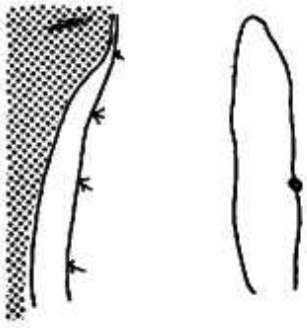
A地点では、並列して2基の窯跡が確認されており、河川よりの方を1号窯跡とする。1号窯跡は、昭和40年に調査が行なわれた。[4] その後、耕作時に深耕した際、スサ入りの粘土、木炭片、焼土等に

混じって、多量の須恵器、瓦等が出土し窯跡と推定されたので、2号窯跡と仮称しておく。窯構造の詳細等については不明である。両者とも焚口を南に向けて並列しており、間隔は約3m程である。

B地点は、A地点の南西、約20m程度の所にあり、東面する段丘斜面にそって、幅10m程の地域に瓦片の散布が認められる。明確な窯跡の所在地点は不明であるが、これまで、相当数の遺物が採取されている。

(b) 小松原1号窯跡と出土遺物

1号窯跡は、主軸をN－99°－Wにもつ、所謂、半地下式無段の窖窯で、平面形は焼成部の中央で若干すぼむような形態を呈するが、焼成部、燃焼部を区分する特別の施設は認められない。全長は、5.7mを測り、焼成部最大幅は1.25mを測る。窯底は、窯尻へいく程急になり、勾配は28°である。(第22図)



第22図　1号窯跡
(柏倉・伊藤　1970)

出土した遺物は、須恵器と瓦である。瓦は、丸瓦が大部分を占め、若干、平瓦を含むが、いずれも二次焼成を受けている。須恵器焼成の際の、焼台等の窯道具として使用されたものと考えられる。須恵器では、器種として、坏、及び蓋があり他の器種は検出されていない。

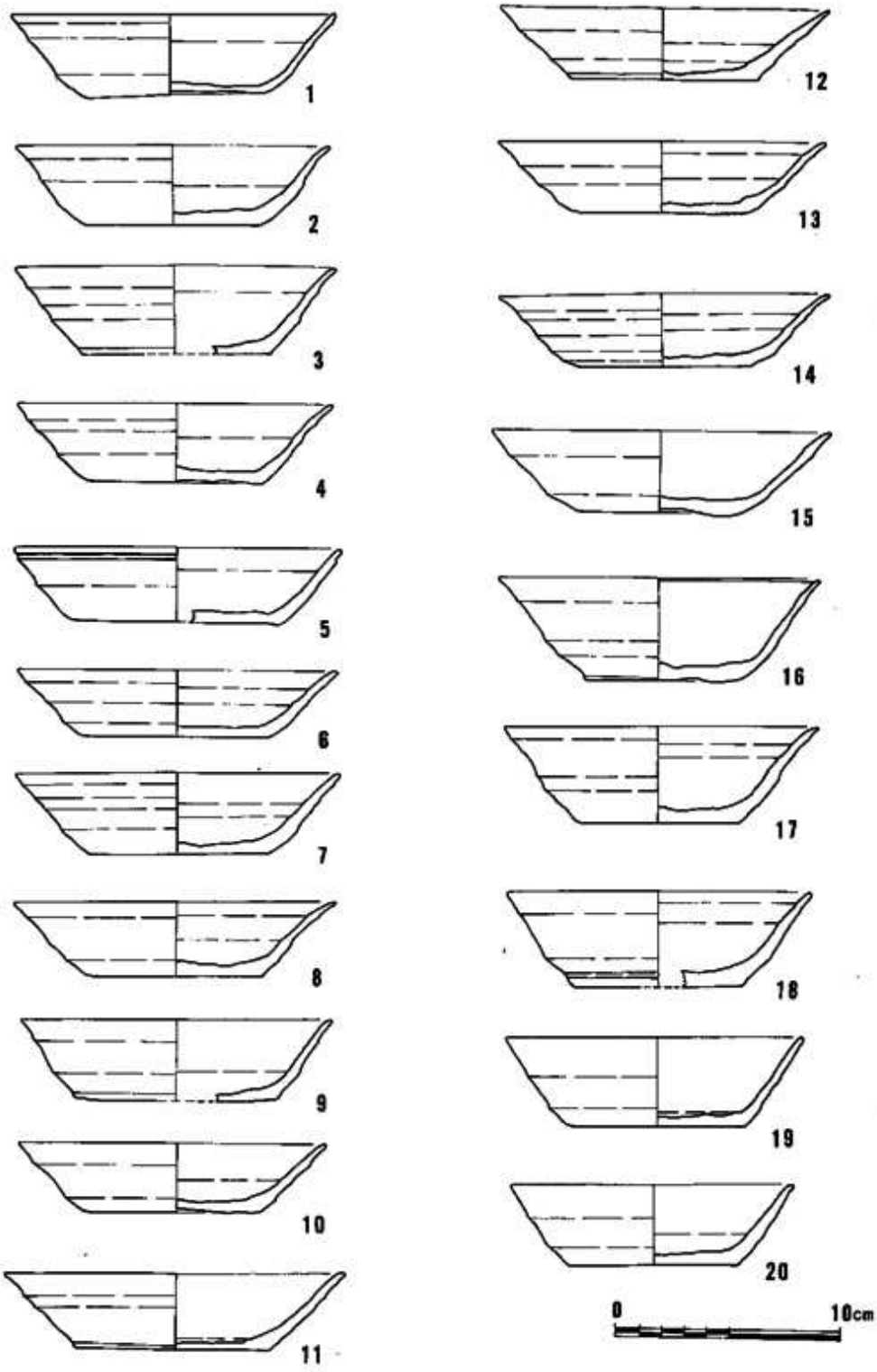
坏　(第23図1～20、第24図21～37)

図化し得たのは37例である。いずれも口径、底径が大きく器高の比較的低い形態を呈するが、比較的大形の坏(第24図23、24)と小形のもの(第24図22)があり、坏の法量にはややバラツキがある。いずれも胎土に砂粒を多く含み、焼成もあまり良好ではない。また、坏の内面下半のみが、淡赤褐色を呈し、生焼けの状態にあるものが散見され、重ね焼きされた状況を反映している。

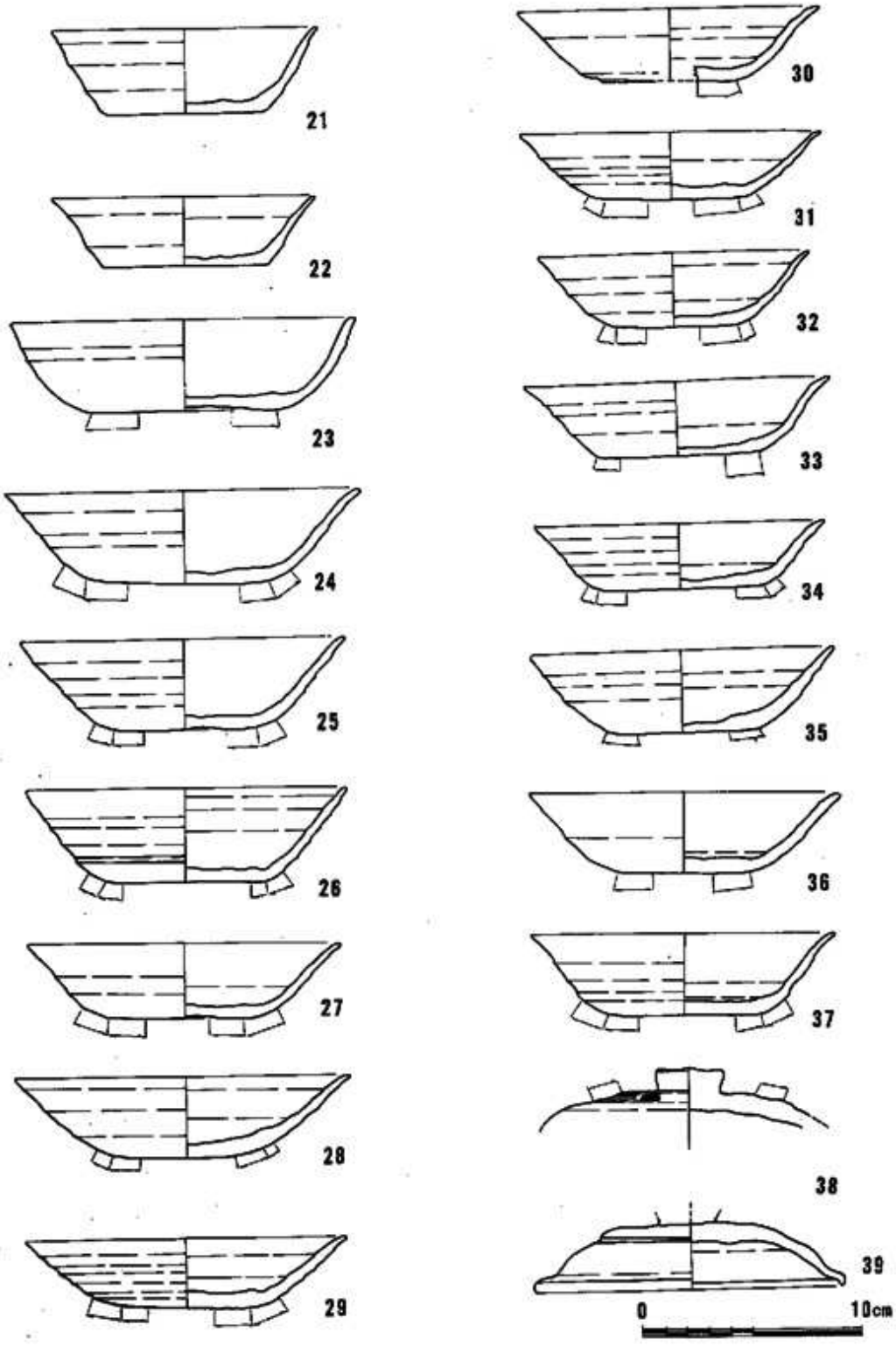
底部の切り離し技法は、全て、ヘラ切りで、糸切り手法によるものは認められない。ヘラ切り無調整(Ⅰ－7類)で、底部から体部の立上りが明瞭なもの(第23図1～20、第24図21、22)と、底部の周縁になで調整があり、丸底風を呈する器形(Ⅰ－5b類)で、底部と体部の境界が不明瞭なもの(第24図23～27)とがある。

蓋　(第24図38、39)

2点のみの出土で、第24図38は、肩部に回転ヘラ削りを併なっている。第24図39では、口縁部が鋭く、くさび状を呈し、Ⅴ－2類として分類できる。



第23図　1号窯跡出土遺物実測図(1)



第24図　1号窯跡出土遺物実測図(2)

(c) 小松原２号窯跡の出土遺物

２号窯跡は、１号窯跡に隣接して所在する窯跡であるが、耕作時に偶然発見されたため、窯の構造、遺物の出土状況等の詳細については不明である。採取された遺物は、須恵器と瓦である。須恵器では、坏、高台坏、甕、壺、蓋等の器種がある。瓦は、丸瓦が多く若干平瓦を含むが、細片が多く二次焼成を受けたものが多い。また風字硯の破片が２点出土している。

坏　（第25図１～11）

図化し得たのは11例である。底部の切り離しは、ヘラ切り手法によるもので、糸切りのものは皆無である。第25図１～７はヘラ切り無調整（Ⅰ－７類）の坏である。器高は低いものが多いが、概して小形である。坏の法量にはバラツキが認められる。第25図８～11は、底部周縁から体部の立上りにかけてなで調整を併なうもの（Ⅰ－５ｂ類）である。

高台坏　（第25図12～15）

４例を図化し得た。やや小形のものが多い。いずれもヘラ切り無調整（Ⅱ－３類）である。

蓋　（第25図16）

図化し得たのは１例のみであった。肩部に回転ヘラ削りを行ない、口縁部は鋭く、くさび状を呈する。（Ⅴ－２類）

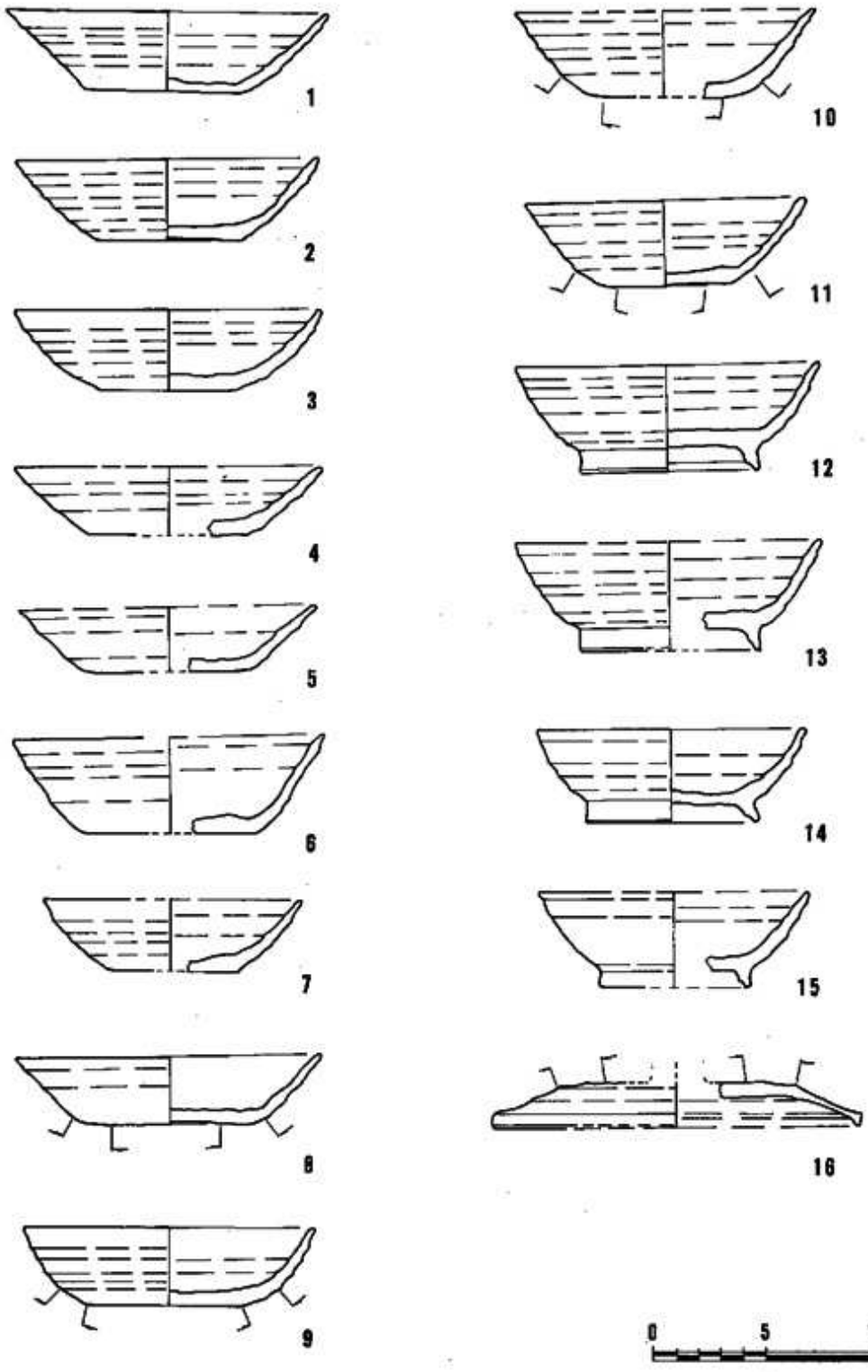
他の器種については図化するまでには至らなかったが、壺には長頸壺の口縁部破片が認められた。甕は大型甕と小形甕の破片がある。また、口縁部が外反し、胴部が長胴形を呈するもの（Ⅴ－３類）がある。

(d) 小松原窯跡Ｂ地点の出土遺物

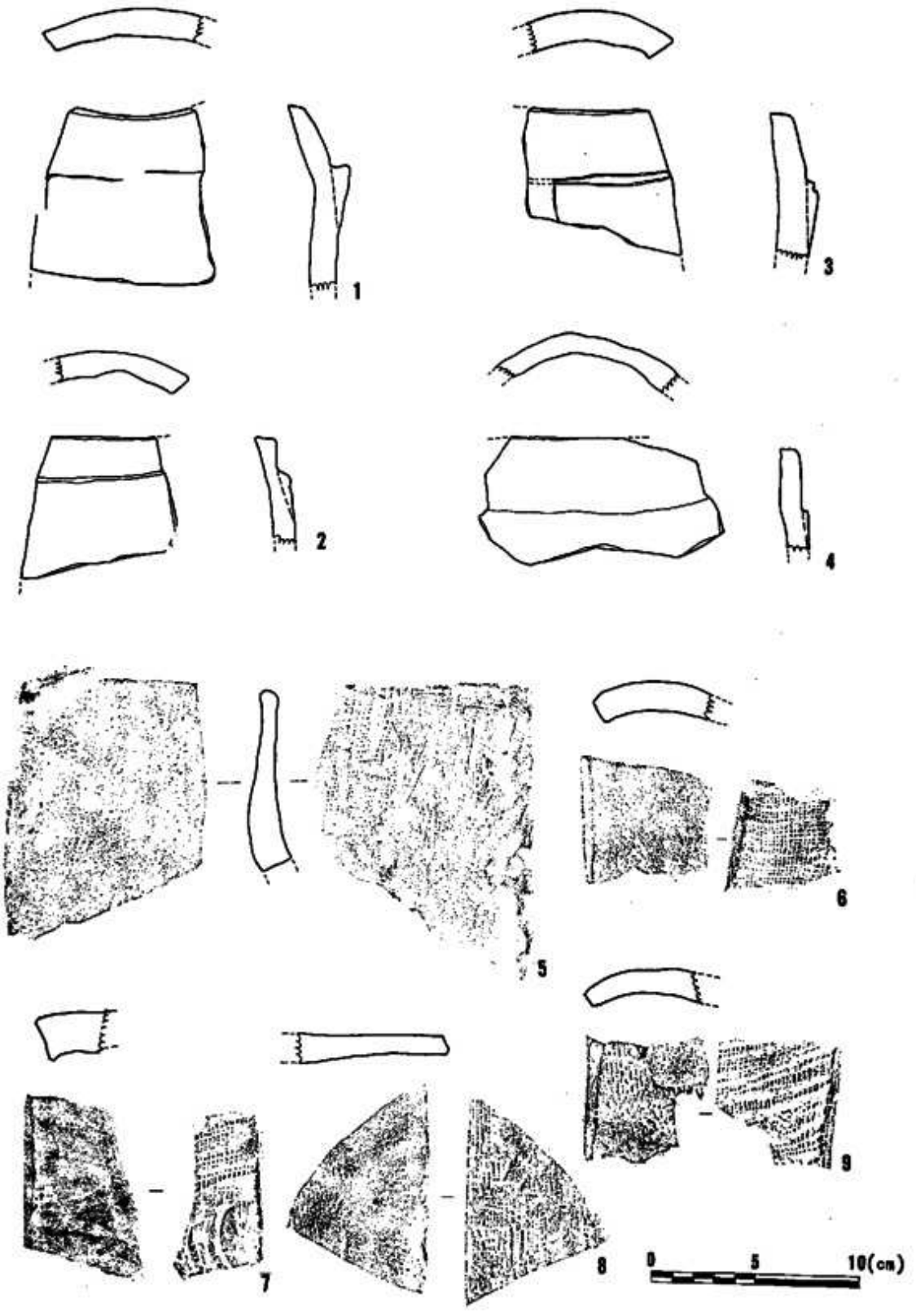
Ｂ地点からは瓦片が出土し、須恵器は認められず焼瓦専業の窯跡であったと考えられる。Ａ地点の１号窯跡の調査所見によれば、須恵器と瓦が検出され、瓦は当該窯跡で焼成されたものではなく、窯道具として使用されたものと考えられる。Ｂ地点のものが流用されたものであろう。これまで採取された瓦は、いずれも破片であるが、平瓦、丸瓦、軒丸瓦等である。

丸瓦（第26図１～４）は、いずれも有段のもので内面に布目痕を残す。第25図３の有段部には一条の沈線が認められる。軒丸瓦は、現在まで数点が採取されている。瓦当面の文様はいずれも同様で同一の笵で造られたものと考えられる。図版13は素弁蓮華文の軒丸瓦で、花弁・蓮子部分ともに陰刻されている。[5] 現存径14cmで、直径15cm内外の瓦当部をもつものと考えられる。内面に縄目状のタタキ痕があり厚さは、1.5cmを測る。一般に瓦当部分の造りは雑である。

平瓦（第26図５～９）は、表面に布目痕、裏面に縄目状のタタキ痕をもつ。



第25図　2号窯跡出土遺物実測図

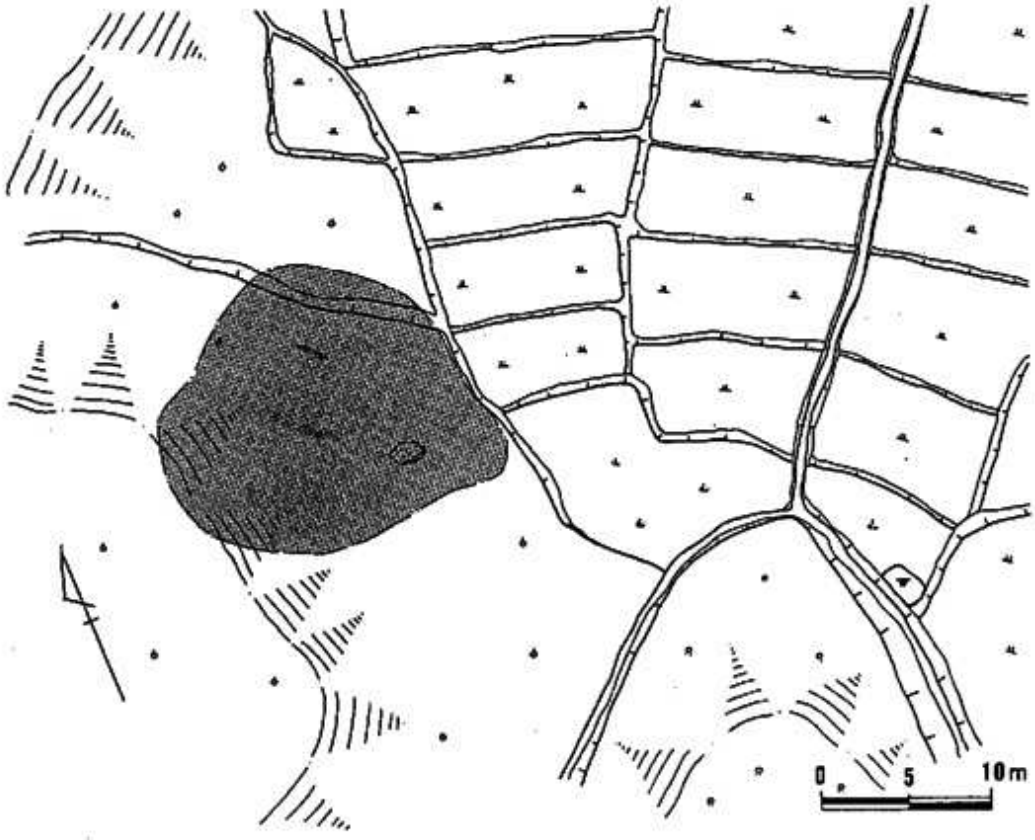


第26図　B地点出土遺物

4．熊野堂窯跡（第1図6）

山形市谷柏、熊野堂に所在する。山形盆地の南端に位置する谷柏付近には、谷柏古墳群を始め、縄文時代から弥生・古墳時代にかけての集落跡が密集している。また、石田遺跡からは墨書土器等も出土しており奈良から平安期における遺跡も複合している。熊野堂窯跡は、谷柏付近の平野部が深く丘陵に入り込んだ谷頭にある。谷は北側に向かって開口し窯跡は三方を斜面にかこまれた谷頭の東面する斜面にあり、傾斜変換線付近に位置する。標高は240 mを測り、現在の地目はブドウ畑である。また窯跡が所在する付近に、〝ガラミキ〟と称する湧水があり、現在でも利用されている。

正式な調査は行なわれておらず、窯跡遺構の所在、その構造等の詳細については不明であるが、後世の破壊を受けた形跡はなく、良好な保存状態にある。遺物は緩斜面にそって、灰原と思われる30×20m程度の範囲に散布している。器種としては、坏・高台坏・甕・壺・蓋等がある。坏の底部は、全て糸切り痕を残すもので、ヘラ切り手法の坏は認められない。器高に比して、底径・口径とも大きく体部は直線的に外反する。また、体部中央に一対の杷手をつくものもある。いずれも破片で表採資料のため図化するまでには至らなかった。



第27図　熊野堂窯跡平面図

5．四ツ谷窯跡（第１図７）

上山市四ツ谷、弁天付近にある。かなり以前に破壊されており、窯跡の明確な地点は不明であるが、県立上山農業高校の対面、国道13号線をはさんだ東側に位置する。付近は上山市の中央部を北流する須川の河岸段丘上にあり、窯跡はその段丘斜面に立地する。ここからは、須恵器と瓦が出土している。瓦は平瓦片で表面に布目痕、裏面に格子目状のタタキ痕がある。また、表面に幅２cm程の模骨痕が認められる。詳細については不明である。

6．三千刈窯跡（第１図８）

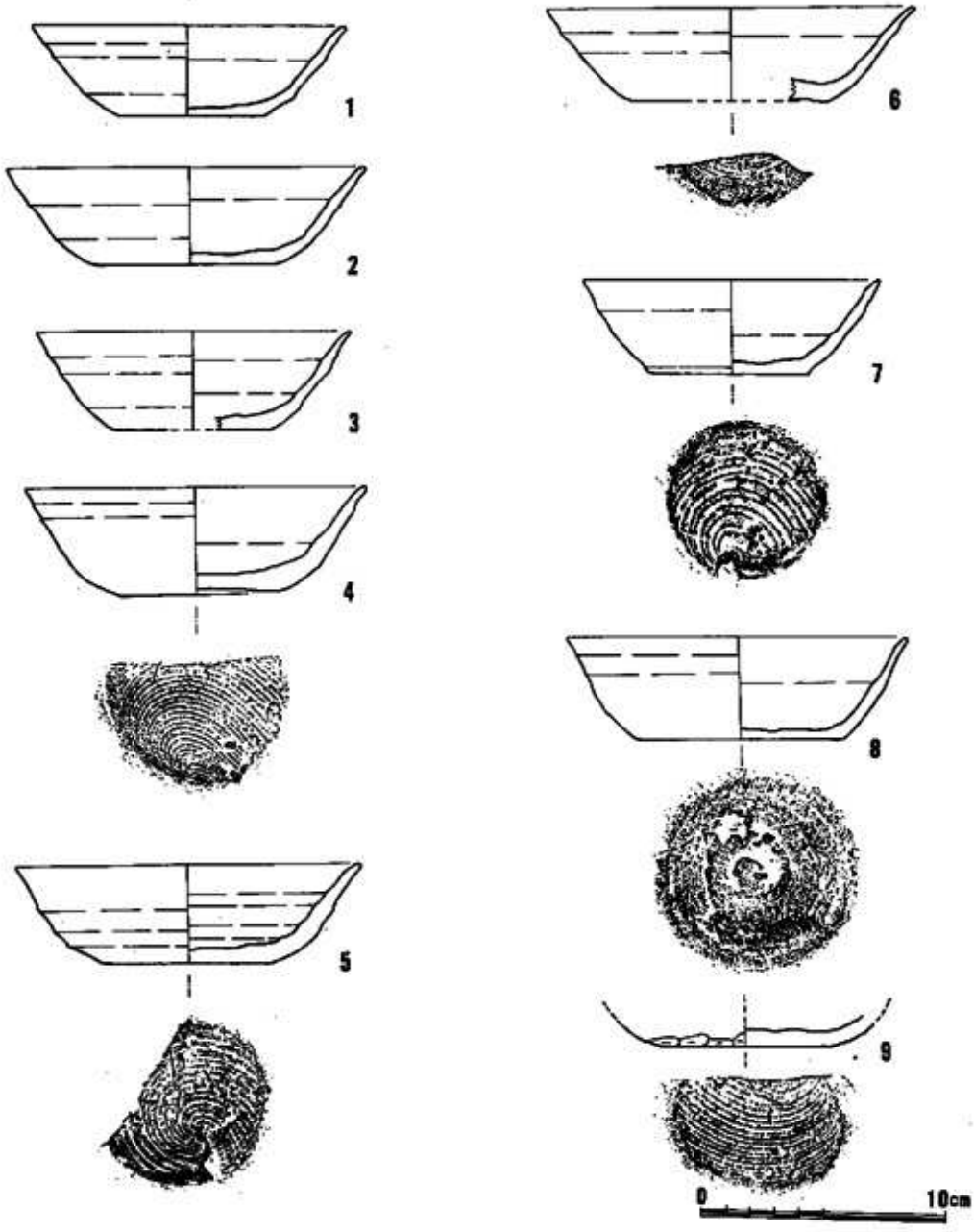
上山市四ツ谷、三千刈に所在する。市街地の西方にあり丘陵山麓の傾斜変換線付近にあたる。窯跡は、三千刈付近一帯の東面する緩斜面に分布し標高は、220ｍを測る。地目は畑、果樹園になっており、少なくとも７地点が確認されている。当該地域は、現在、宅地として造成されており、それに併なう事前調査が行なわれている。それによれば丘陵の東南斜面に点々と散在し、かなり大規模な窯場を形成していたようである。（第28図）

当該窯跡からは、昭和54年に行なわれた事前調査によって多量の須恵器が出土している。第29図１～９はその一部である。第29図１～３は、ヘラ切り無調整の坏（Ｉ－７類）であり４～７は糸切り無調整（Ｉ－３類）である。また糸切りで手持ヘラ削りの再調整を併なうもの（Ｉ－１類）もある。また、以前に内藤政恒氏によって三千刈出土の軒丸瓦、軒平瓦が紹介されたことがある。[6] 最近、三千刈地区にある大堤の北側斜面から軒丸瓦の破片が出土しているとの知見を得た。[7] それは、八葉の素弁蓮華文を瓦当面にもつもので、周囲に連珠文帯をめぐらし、焼成は堅緻で良好である。

第28図　三千刈窯跡平面図

7．葉山窯跡（第１図９）

上山市高松、葉山に所在する。丘陵山麓の南面する斜面に３基の窯跡が確認されている。昭和32年５月に調査が行なわれ、[8] これが本県における最初の窯跡の調査例となり、県の指定史跡となっている。３基の窯跡が確認されたが、第３号窯跡が比較的旧状を留めていたが、他の２基は破壊が著しく完掘されていない。

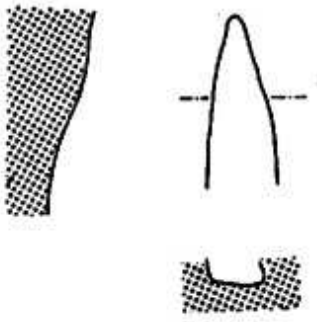


第29図　三千刈窯跡出土遺物

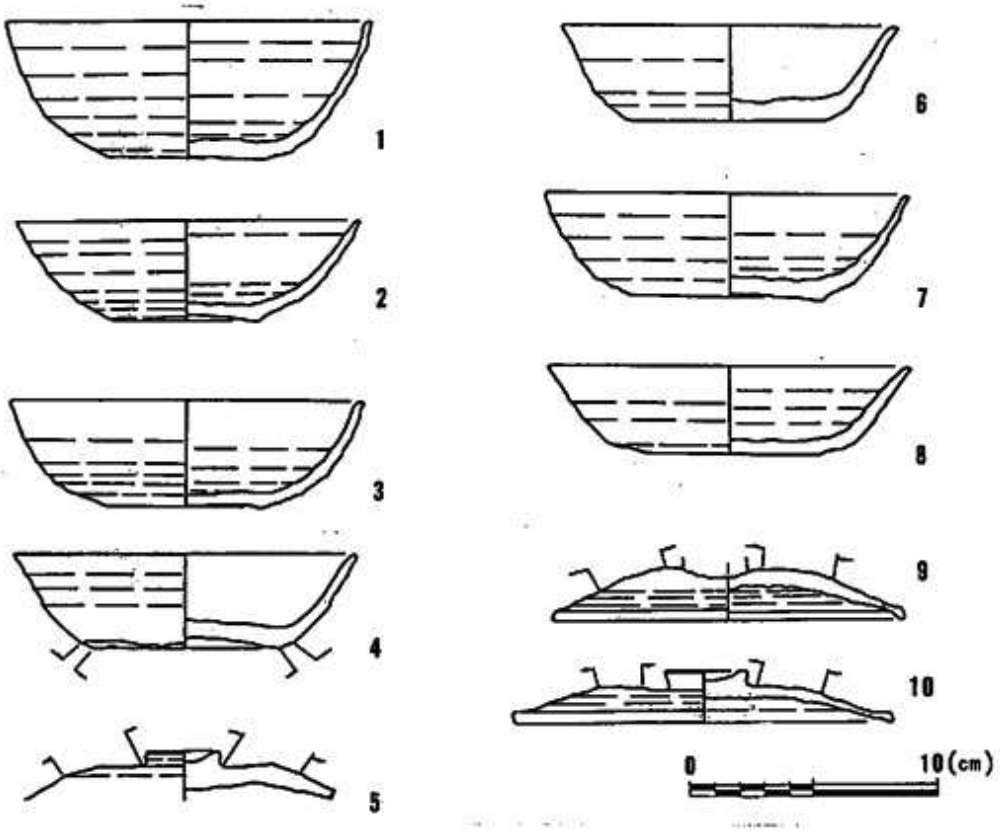
第３号窯跡は、焼成部のみ検出され、燃焼部、焚口部の状況は不明である。焼成部は胴張りの形態を呈し、主軸はＮ～Ｓにもち、現存長3.5ｍである。幅は、最大で1.4ｍを測り、窯底の勾配は27°である。（第30図）

第31図は、３号窯跡出土の須恵器の一部である。坏はすべて糸切り手法のもので、無調

整のものと、手持ヘラ削り調整を併なうものとがある。器高は低く、口径・底径が大きい大形の坏が多い。蓋では、肩部に回転ヘラ削り調整を併なう。



第30図　3号窯跡出土遺物
（柏倉・伊藤　1970）



第31図　葉山窯跡出土遺物実測図

Ⅳ 考　　察

1．久保手窯跡検出の遺構について

今回の調査で検出された遺構は、Ⅲ章で述べたように、重複する２基の窯跡と土坑１基であった。当該遺跡は、昭和39年頃、雑木林であったものを開墾した際、偶然に発見されたもので、その時、多量の須恵器が出土し路傍に山とつまれている状況を眼にしている。今回の調査も遺跡の一部を調査しただけであり、その全様を把握するまでには至っていない。地元の耕作者によれば、南から北方へ向かって張り出した尾根の東斜面で、久保手窯跡は、その北端部に位置するが、そのもっと南側の地点からも以前須恵器が出土したということであった。この尾根の東斜面にそって複数基の窯が営まれていたものと考えられる。近くには、三千刈窯跡があり、一帯はかなり大規模な窯業生産地を形成していたものと推測される。

今回の調査で検出された２基の窯跡は、重複した状態で検出され、両者の間には、その構造、規模などに差異が認められる。

１号窯跡では、平面プランが胴張りの形態を呈し、焼成部と燃焼部を区別する特別の施設はなく焚口部に土坑状の平場を併なうものである。遺存しているのは窯底付近のみであり、その上部構造まで言及することはできないが、主軸は２号窯跡と同じであった。２号窯跡では、焼成部は側壁をスサ入りの粘土を貼り付けて整形し、燃焼部は掘り込んだ斜面にそって、こぶし大から人頭大の礫を組んで配置している。窯底では、勾配の変化が認められ、階のような特別な構造はないものの、両者を機能的に明確に区別していることは注目される。寒河江市、平野山２号窯跡では、燃焼部の側壁部分に平瓦を配置しているのが確認されている[9]が、同例と考えられる。また、焚口部は馬蹄形に開口し、焚口前に土坑状の掘り込みが認められた。その底面は熱変している形跡はないが、硬くしまっている。前庭部としての作業時の平場を確保したものと考えられる。

両窯跡の前後関係は、下位の１号窯跡から上位の２号窯跡へ移行したことは自明であり、焼成部のたちわり溝の層序の観察などからも検証される。１号窯跡を廃棄し、同一選地内に２号窯跡を構築したものと考えられる。両窯跡の主軸はほぼ同一で、窯尻付近の煙り出し部の平面プランは一致しており、２号窯跡は１号窯跡のプランを拡張、構築し両者の間に断絶はなく連続的に営まれたものと推測される。

２号窯跡は、比較的良好な遺存状態で、側壁は２回にわたる貼壁が確認された。一般に当該期の須恵器焼成は地下にうがった窖窯で行なわれた。本県の場合、所謂、半地下式窖

窯が一般的である。地下式窖窯は県内の須恵器焼成の開始期にあたる米沢市、木和田窯跡で検出されているのみである。その構造上、再度の焼成には何らかの補修を必要とする。貼壁は、高温度焼成によって生じた側壁の亀裂、破損等をスサを混入した粘土で補修したもので、貼壁の回数は焼成回数に対応するものと考えられる。２号窯跡では、構築後、少なくとも３回の焼成が行なわれたと推測される。焼成部の床面から検出された一括遺物は窯廃絶期のかなり限定された時期の土器様相を示すものであろう。

１号土坑は、その底面が火熱を受けて赤変していた。覆土には多量の木炭片と焼土を含み、その機能としては、何らかの焼成を目的とした遺構と考えられる。土坑の底面は浅い皿状を呈し平坦で段掘りされており、上段の底面、及び立上り付近に熱変した形跡が認められた。窯跡としては、かなり小形であり、山形市三本木２号窯跡[10]、及びＳＫ３[11]などに類例が認められる。しかし、積極的に上部構造を想起し得るような根拠は認められない。上部を開放した酸化炎焼成の遺構とも考えられるが、遺物は生焼け状態を呈するものは散見されるが、明らかに酸化炎で焼成されたと認められるものはなく、所謂、あかやき土器の生産に関しては今後の課題である。

遺物の出土状況をみると、土坑内出土遺物は、１号窯跡、及び２号窯跡出土の遺物と酷似し、両者が混在した状態で検出された。また、あるものは窯跡内出土遺物と接合する例も認められ、その性格としては、１・２号窯跡両方の操業時に機能した土器捨て場的なものとも考えられる。

２．久保手窯跡出土の遺物について

今回の調査で得られた遺物は前述したように、ロクロからの切り離し手法、再調整の技法やその有無、あるいは器形的な特徴など、遺構ごとに若干の相違が認められた。各器種は、それらの点を基準として５種20類に細分したが、各遺構出土の須恵器について、その組成を示したのが第４表である。

各窯跡の出土状況をみると、焼成部の床面では、坏の半割品、あるいは甕体部の破片が多く認められる。その断面には二次焼成によってガラス質の釉が吹き出したものや、互いに溶着したものが散見される。これらは焼成時の製品と言うより、窯道具として置台的に使用されたものと考えられる。

１号窯跡では、窯底付近しか遺存していないため検出された遺物は総数で85点と少なかった。Ⅱ～Ⅴの器種においては、２号窯跡の出土遺物と特に差異を認めることはできないが、坏（Ⅰ）ではかなり様相を異にしている。底部の切り離しは、糸切り手法によるものが多く、糸切り無調整（Ⅰ－３類）が主体を占める。それに手持ヘラ削りの再調整を併な

うもの（Ⅰ－1類）がある。ヘラ切り手法によるものは全体の3割りを占め、無調整のもの（Ⅰ－7類）と手持ヘラ削りのあるもの（Ⅰ－6類）とがある。

2号窯跡では、ヘラ切り手法によるものが圧倒的であり、糸切り手法によるものは、わずか3点を数えるのみであった。主体を占めるのは、ヘラ切り無調整（Ⅰ－7類）であり、底部全体、及びその周縁になで調整を併なうもの（Ⅰ－5a、b類）がある。またⅠ－8類として分類した器形は、底部は丸底でその周縁に回転ヘラ削り調整を併ない、蓋受部で〝くの字〟状に屈曲し内傾ぎみに立上るものである。このような器種は、5世紀～6世紀の古墳時代を中心とする時期に認められるが、2号窯跡出土例では、蓋受部の突起が不明瞭でほとんど退化しており、口縁部の立上りが内傾している点など当該時期の蓋坏とは若干の違いがある。県内における調査例では類例を認めることはできず、平底の坏と共伴しており、普遍的に両者が共存するとは考え難い。

1号土坑では、1・2号両窯跡の遺物が混在したような状況にあるが、坏では糸切り手法のものが7割を占める。そのなかに、手持ヘラ削りを併なうもの（Ⅰ－1類）回転ヘラ削りのあるもの（Ⅰ－2類）及び無調整のもの（Ⅰ－3類）がある。底部周縁になで調整のある（Ⅰ－4類）ものも存在する。ヘラ切り手法の坏では、底部周縁になで調整のあるもの（Ⅰ－5b類）が多いが、無調整（Ⅰ－7類）、及び手持ヘラ削りのあるもの（Ⅰ－6類）も存在する。

他の甕、壺、蓋等の器種においては、各遺構とも特別の差異を認めることはできない。

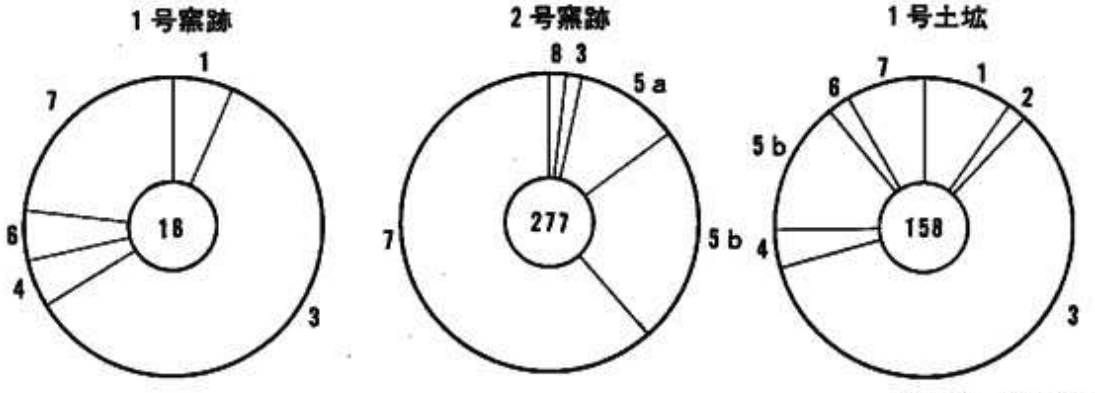
次に、これら遺物の編年的位置について考えてみたい。1・2号窯跡は、調査時の所見や出土遺物の検討から、そう長期にわたって機能したとは考えられず、同一工人によって継続的に営まれたものと推測される。1号窯跡の出土遺物は、2号窯跡出土遺物の前段階の土器様相を示すものであり、編年的には、1号窯跡→2号窯跡と連続的位置付けが可能となる。窯跡の実年代については、県内における須恵器編年の確立していない現状では明言できないが、他の出土例の比較検討により推定は可能である。

山形市宮町三小敷地内遺跡では、校舎新築の際の出土であり遺構内での共併が確認されてはいないが、Ⅰ－2類、Ⅱ－1類、及びⅤ－2類と内黒の丸底坏が同時に出土している。[12] 丸底坏は、体部中央より下位の底部からの立上り付近に段が認められる。他には、高坏・長胴甕等があり、国分寺下層式に位置付けられるものと考えられる。山形市下反田遺跡2号落ち込みでは、坏のⅠ－1、2類、及びⅠ－5b類とロクロ未使用の内黒丸底坏、内黒平底坏、及び長胴甕と共伴している。[13] 宮城県多賀城跡周辺の研究成果をふまえればⅠ－1類は、岡田・桑原氏の8類、Ⅰ－2類は7類に比定できると考えられる。[14]

久保手1号窯跡は、おおむね8世紀末葉頃の所産とみて大過ないものと考えられる。2号窯跡は、1号窯跡から後出する時期であり9世紀初頭と考えたい。

第4表　久保手窯跡出土遺物組成表

器　種	区　分	1号窯跡焼成部	2号窯跡焼成部	1　号　土　坑
坏（Ⅰ）	1	○		○
	2			○
	3	○	○	○
	4	○		○
	5a		○	
	5b		○	○
	6	○		○
	7	○	○	○
	8		○	
高台坏（Ⅱ）	1			○
	2		○	
	3		○	○
	4			○
壺（Ⅲ）	1	○		○
	2	○		○
甕（Ⅳ）	1	○	○	○
	2	○	○	○
	3	○		
鉢（Ⅴ）	1			○
	2	○	○	○



第32図　組成図

3．法量と形態　（久保手２号窯跡出土の坏について）

久保手２号窯跡から検出された遺物のうち、器種としては、坏が最も多く、54例を図化し得た。坏は供膳としての機能を有するものであり、正倉院文書などから、奈良時代後半には、主食を盛る椀、汁をいれる坏、菜をいれる盤、饗坏、塩坏の五器を一人分の食器とする食膳形態があったことが知られている。当該時期の須恵器のうち供膳形態の器種でも法量の差としての機能分化が進んだことは周知の通りである。

久保手２号窯跡出土の坏を概観した場合、口径・器高など、その法量に一定のまとまりが認められ、製品としての規格性を意図していたことが看取される。第５表を参照しながら法量について検討を加えてみる。

口径（第33図・第６表）

最小11.4cm、最大15.1cmで、その幅は3.7cmである。口径の知れるものは51例である。0.5cmごとの階級をとり、その度数分布をみると13.0～14.5cm付近に集中し、全体の84％を占める。度数分布図をみると13.75cmにピークをもつ対象形を呈し、集中率は良好である。代表値、及び標準偏差は次式から次のようになる。

$$\bar{x}=\frac{1}{N}\Sigma xf \fallingdotseq 13.71\,cm \qquad S=\sqrt{\frac{1}{N}\sum_{K=1}^{n}(x_K-\bar{x})^2 f_K} \fallingdotseq 0.658$$

底径（第33図・第６表）

最小5.8cm、最大9.6cmで、幅は3.7cmである。底径の既知なるものは37例である。口径と同様に0.5cmの階級をとり度数分布をみると、8.0～9.0cm付近に集中するが、口径に比較して、集中率はそう顕著ではない。代表値、及び標準偏差は次式から、

$$\bar{x}=\frac{1}{N}\Sigma xf \fallingdotseq 7.96\,cm \qquad S=\sqrt{\frac{1}{N}\sum_{K=1}^{n}(x_K-\bar{x})^2 f_K} \fallingdotseq 0.905$$

となる。

器高（第33図・第６表）

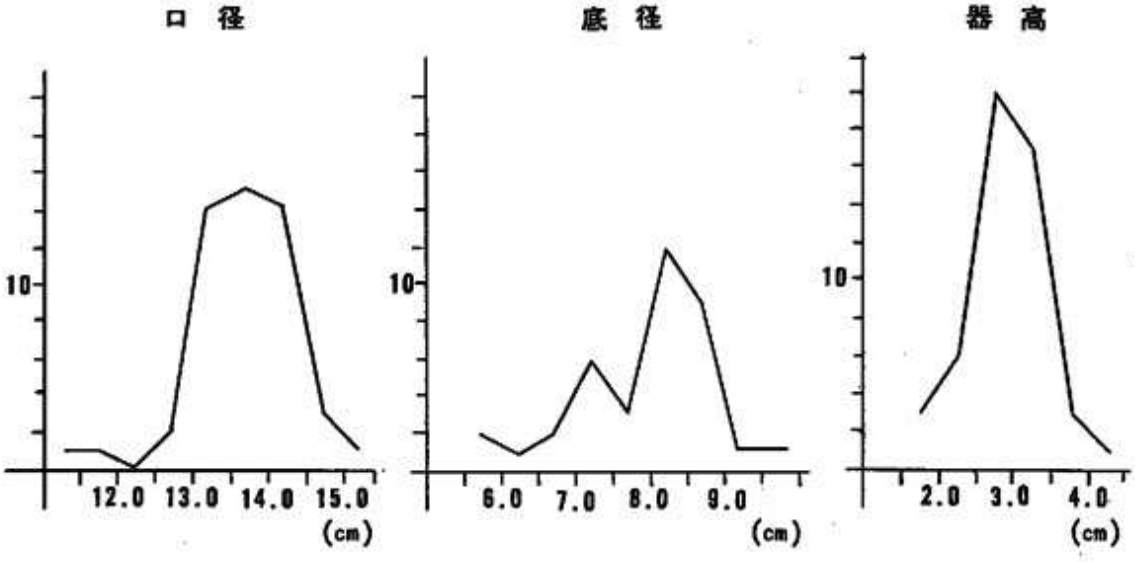
最小2.3cm、最大4.5cmであり、その幅は2.2cmを計る。器高の既知なるものは、50例である。同様にして、0.5cmごとの階級をとり度数分布をみると、3.0～4.0cmに集中し、全体の74％を占める。度数分布図をみると、3.25cmにピークをもつ対象形を呈し、集中率は最も良い。代表値、及び標準偏差を求めると次のようになる。

$$\bar{x}=\frac{1}{N}\Sigma xf \fallingdotseq 3.39\,cm \qquad S=\sqrt{\frac{1}{N}\sum_{K=1}^{n}(x_K-\bar{x})^2 f_K} \fallingdotseq 0.510$$

以上のことにより、口径・底径・器高はともに、それらの代表値に近く集中する傾向が

認められる。特に口径・器高にその傾向が認められるが、底径は、標準偏差が前二者と比較して大きく、集中化の傾向は弱い。器高は最も集中率が高い。器高・底径・口径の比率関係をみると、1：2.3：4.0となっている。底径は前述した様にバラツキが大きいので、若干、問題はあるが、口径は器高の4倍、底径は2倍強となり、製作時の規格品化への意識性が反映されていると考えられる。口径・器高の相関表によれば、口径13.9cm、器高3.4cm付近に中心をもち、周辺に移行するに従って順次、個体数が減少する関係にあり、このことは、偶然性というよりは、形態、法量に対する一定の意識性の反映と解釈するのが妥当と思われる。(第9表)

また、口径・器高に比して、底径のバラツキが大きいことについては前述したが、久保手2号窯跡出土の坏では、ロクロからの切り離し手法は、ヘラ切りのものが大部分であり98%を占める。器体の器面調整後、その切り離す位置（深さ）によって、器高・底径、及び底部の厚さが決定されるが、底径のバラツキは、器壁の立上り状況として、外反ぎみに立上る場合、内湾ぎみに立上る場合、及び直線的に立上る場合など、微視的な検討が必要と考えられる。



第33図　口径・底径・器高度数分布図

第5表　久保手2号窯跡出土遺物計測表

番号	分類区分	法量			摘要	挿図番号
		口径	底径	器高		
1	7類	14.5	8.8	2.9	ゆがみ著しい	第11図
2	〃	13.9	8.8	3.2		〃
3	〃	13.8	8.7	4.1		〃
4	〃	13.8	8.0	3.5		〃
5	〃	13.7	7.9	3.5		〃
6	〃	13.8	8.3	2.7	底部中央欠損	〃
7	〃	14.4	8.2	3.4		〃
8	〃	13.4	8.3	3.1	底部欠損、表面に自然釉付着	〃
9	〃	13.3	8.6	2.7	底部欠損、ゆがみ著しい	〃
10	〃	14.0	8.1	3.8		〃
11	〃	14.9	7.6	3.0	底部うず巻き状痕有り	〃
12	〃	13.8	8.2	3.3	底部欠損	〃
13	〃	14.2	8.9	2.4	底部うず巻き状痕有り	〃
14	〃	13.5	6.4	3.5	底部欠損	〃
15	〃	14.2	8.5	3.6		〃
16	〃	13.8	8.3	3.9	半欠品	〃
17	〃	14.2	9.6	3.1	半欠品	〃
18	〃	13.7	7.4	3.1	半欠品	〃
19	〃	13.4	8.1	2.3	ゆがみ著しい、底部うず巻き状痕有り	〃
20	〃	14.2	7.5	4.0		〃
21	〃	14.2	8.7	3.9		〃
22	〃	14.2	8.5	2.6		第12図
23	〃	14.1	8.0	3.3		〃
24	〃	12.8	7.4	3.1		〃
25	〃	14.4	7.0	3.2		〃
26	〃	13.5	8.4	3.5		〃
27	〃	13.9	7.3	3.5		〃
28	〃	15.1	9.0	2.5	底部中央部欠損	〃
29	〃	14.2	8.2	3.2		〃
30	〃	14.7	8.4	3.5		〃
31	〃	13.4	7.1	3.3		〃
32	〃	13.2	6.8	3.3	ゆがみ著しい	〃
33	〃	13.2	6.5	3.4		〃
34	〃	11.4	5.6	3.4		〃
35	〃	14.0	5.8	2.8		〃
36	〃	13.5	8.5	3.4		〃
37	5a類	13.8		4.0	口縁部の一部を欠損	〃
38	〃	13.0		3.7	完形	〃
39	〃	13.0		3.6	底部中央にうすくヘラ切り痕有り	〃
40	〃	13.1		3.3		〃
41	5b類	13.1		3.7		第13図
42	〃	13.0		3.5		〃
43	〃	13.0		3.8		〃
44	〃	14.4		3.6		〃
45	〃	14.0		3.2	底部欠損	〃
46	〃	13.0		3.1		〃
47	〃	13.5		3.2		〃
48	〃	13.8		3.5		〃
49	〃	12.5		2.4	ゆがみ著しい	〃
50	3類		7.2			〃
51	8類	13.0		4.5		〃
52	〃	11.5			口縁部の一部のみ	〃
53	〃			7.2	底部半欠品	〃
54	〃			8.3	〃	〃

第6表　口径度数分布表

階　級	階級値 (x)	個体数 (f)
11.0 ～ 11.5	11.25	1
11.5 ～ 12.0	11.75	1
12.0 ～ 12.5	12.25	0
12.5 ～ 13.0	12.75	2
13.0 ～ 13.5	13.25	14
13.5 ～ 14.0	13.75	15
14.0 ～ 14.5	14.25	14
14.5 ～ 15.0	14.75	3
15.0 ～ 15.5	15.25	1
合　計 (N)		51

第7表　底径度数分布表

階　級	階級値 (x)	個体数 (f)
5.5 ～ 6.0	5.75	2
6.0 ～ 6.5	6.25	1
6.5 ～ 7.0	6.75	2
7.0 ～ 7.5	7.25	6
7.5 ～ 8.0	7.75	3
8.0 ～ 8.5	8.25	12
8.5 ～ 9.0	8.75	9
9.0 ～ 9.5	9.25	1
9.5 ～ 10.0	9.75	1
合　計 (N)		37

第8表　器高度数分布表

階　級	階級値 (x)	個体数 (f)
2.0 ～ 2.5	2.25	3
2.5 ～ 3.0	2.75	6
3.0 ～ 3.5	3.25	20
3.5 ～ 4.0	3.75	17
4.0 ～ 4.5	4.25	3
4.5 ～ 5.0	4.75	1
合　計 (N)		50

第9表　口径・器高相関表

器高 / 口径	2.0~2.5	2.5~3.0	3.0~3.5	3.5~4.0	4.0~4.5	4.5~5.0	合　計
11.0~11.5			1				1
11.5~12.0							0
12.0~12.5							0
12.5~13.0	1		1				2
13.0~13.5	1	1	6	5		1	14
13.5~14.0		1	5	7	2		15
14.0~14.5	1	2	7	3	1		14
14.5~15.0		1	1	1			3
15.0~15.5		1					1
合　計	3	6	21	16	3	1	50

4．周辺地域の窯跡群について

前述した様に、当該地域には久保手窯跡を含め、９ヶ所の窯跡群がある。そのなかには、上山市四ツ谷窯跡など、明確な地点が不明なものも含まれるが、現段階での所見を整理、検討しておきたい。

(1) 瓦について

瓦を出土している窯跡は、山形市オサヤズ前、オサヤズ窯跡、小松原窯跡、上山市四ツ谷、三千刈の各窯跡がある。造瓦専業の窯跡は、山形市オサヤズ前、オサヤズ窯跡であり、他は須恵器との兼業である。しかし、同一の窯跡で焼成されたかは不明である。山形市小松原窯跡では、地点を異にして焼成されている。これらの瓦が製作された時期については判然としないが、山形市小松原１号窯跡では、須恵器焼成の際の窯道具として丸瓦、平瓦を使用している。須恵器は、坏ではヘラ切り手法のＩ－５ｂ類、７類を主体とするもので、上山市久保手２号窯跡出土の遺物と類似し、９世紀初頭頃の所産と考えられる。小松原窯跡Ｂ地点では、多量の瓦片が採取されており、時期的には１号窯跡と同一期と推定される。

また、上山市三千刈地区に所在する大堤の北側斜面から、軒丸瓦の破片が出土しているとの知見を得た。同地区からは、以前にも内藤政恒氏によって紹介された遺物が出土しているが、[15]それは、瓦当面に素弁蓮花文をもち、奈良時代に遡る可能性があり注目される。

山形県の内陸部における瓦の出土地をみると、次のような地域から出土している。

寒河江市石田

東根市日塔薬師原

高畠町高安

いずれも出土数が少なく、正式な調査が行なわれていないので、その性格、時期等の詳細は不明である。宮城、福島両県と比較しても、瓦を出土する遺跡数は極めて少なく、瓦自体の出土量も僅少である。酒田市城輪柵遺跡などにおいても、遺跡の規模からすれば、瓦の出土は極めて少ない。山形県という気象的立地状況からすれば、冬期の寒冷、積雪などにより、総瓦葺きではなく、軒先部分などに部分的に瓦が使用されたと考えられるという指摘もある。

瓦は、一般の日常什器としての須恵器とは異なり、特定の官衙、寺院などの需要によって製作、供給されたものであり、付近に供給地を求めることができると考えられるが、現状では、山形市南西部から上山市西部の当該地域にかけて所在する瓦窯跡の供給地を同定することはできない。瓦窯跡の調査とともに、その供給地との関連を追求することは、今後の課題である。

(2) 須恵器について　（窯跡編年の試案）

当該地域に所在する窯跡で、調査が行なわれたのは、久保手窯跡と、山形市小松原１号窯跡、葉山３号窯跡などである。他の窯跡については正式な調査は行なわれていないが、これまで、多くの遺物が表採されている。表採資料については、遺構内出土の遺物と同一にあつかうことは出来ないが、窯跡の操業時期を推定する一助となるので、これらを参考として検討を加えてみる。各窯跡の出土遺物を分類すると第10表のようになる。

これによれば、葉山３号窯跡、熊野堂窯跡では、糸切り手法の坏を主体とし、ヘラ切り手法のものは皆無である。葉山３号窯跡では、手持ヘラ削りの再調整を併なうＩ－１類があり、第31図１のように大形の椀のような器種もある。熊野堂窯跡出土の坏は、表採資料ではあるが、口径・底径が大きく、器高が低い器形を呈し、比較的古い様相を反映している。三千刈窯跡は、数地点があり、底部の切り離し手法が、糸切りによるものとヘラ切りによるものとがある。手持ヘラ削りの再調整を併なうＩ－１類も出土している。一方、小松原１号窯跡、２号窯跡では、ヘラ切り手法の坏が主体となり糸切り手法の坏は全く無い。

このように、各窯跡の出土遺物を検討すると、その組成に相異が認められ、その操業時期には若干の前後関係があったものと考えられる。しかし巨視的には、８世紀後半から９世紀初頭にかけて営まれたものと考えられる。

さて、これらの窯跡の編年的位置について試案を述べてみる。県内の須恵器焼成の開始期は、８世紀前半頃で、米沢市木和田窯跡がある。[15] 山形盆地では当該時期の窯跡は確認されていない。上山市葉山３号窯跡では、前述したような土器様相を示し、米沢市木和田窯跡に後出する時期と考えられる。久保手１号窯跡では、葉山３号窯跡より若干新しい様相を示すことから、８世紀末葉と推測される。久保手２号窯跡は、その重複関係から１号窯跡に後出する時期であり９世紀初頭と考えられる。山形市小松原１号窯跡は、ヘラ切り手法の坏を主体とし、久保手２号窯跡出土の遺物と類似し、併行する時期と考えられる。当該地域の須恵器焼成は、９世紀前半頃を下限として窯は廃絶し、須恵器生産の中心地は、山形盆地の場合、寒河江市平野山、山辺町玉虫沼周辺などに移行する様である。

以上の結果をふまえて整理すると第12表のようになる。一応、現段階での窯跡を編年し順列した所見であり、試案である。

Ⅵ 総　括

今回の調査によって検出された久保手１、２号窯跡を中心として述べてきたが、時期的には、８世紀末葉から９世紀初頭頃に営まれた窯跡と推定される。両者の重複状況から、編年的には、１号窯跡→２号窯跡という把握が可能である。また、山形市南西部から上山市西部の丘陵にかけては、前述したように、久保手窯跡を含め９ヶ所の窯跡群が所在している。これらは、出土遺物の検討などから、８世紀末葉から９世紀前半にかけて営まれたものと考えられ、時期的にもまとまっており、当時の律令制下における大規模な須恵器生産地を形成していたものと思われる。当該地域の窯跡には瓦を生産した瓦窯跡も含まれている。瓦は、寒河江市平野山窯跡群から比較的まとまって出土しており、複弁蓮花文軒丸瓦、花文軒平瓦等が検出されており、時期的には平安時代後半と考えられる。[17] 山形市から上山市へかけての瓦窯跡は、山形市小松原Ｂ地点の瓦窯跡では、９世紀初頭頃と考えられ、また上山市三千刈窯跡では、奈良時代に遡る可能性をもつものも出土しており、寒河江市平野山に先行する瓦窯跡群である。その供給地は、現在のところ不明であり、その追求は今後の課題である。

須恵器生産に関する問題については、米沢市木和田窯跡の発見によって、その開始期を８世紀前半代に位置付けることが可能となった。山形盆地では当該時期に比定される窯跡は未確認であるが、それに後出する葉山３号窯跡、久保手１号窯跡などがある。

平野部に所在する遺跡では、山形市下反田遺跡、[18] 同塩辛田遺跡、[19] 山形市宮町山形三小敷地内遺跡、[20] 上山市金谷、飯の森遺跡[21]などがある。今後、窯跡とその消費地としての、集落、官衙跡などの有機的関係を把握し追求することが必要であり、本報告書がその一助となれば幸いである。

第10表　各窯跡出土遺物組成表

器種・区分 ＼ 窯跡名		長者屋敷窯跡	小松原1号窯跡	小松原2号窯跡	熊野堂窯跡	三千刈窯跡	葉山3号窯跡
坏（Ⅰ）	1					○	○
	2						
	3				○	○	○
	4						
	5a						
	5b		○	○			
	6						
	7		○	○		○	
	8						
高台坏（Ⅱ）	1				○	○	○
	2				○	○	
	3			○		○	
	4					○	
壺（Ⅲ）	1			○		○	
	2					○	
甕（Ⅳ）	1	○		○	○	○	○
	2			○	○	○	○
	3			○		○	
蓋（Ⅴ）	1						
	2			○	○	○	○

第11表　窯跡編年表（試案）

年代	山形盆地	米沢盆地	庄内地方
8C中葉		木和田窯跡	
8C後半～末葉	葉山3号窯跡 久保手1号窯跡	壇山1号窯跡	
9C初頭～前半	久保手2号窯跡 小松原1号窯跡		願瀬山4号窯跡 荒沢1号窯跡
10C	平野山1・2号窯跡		
11C	三本木1号窯跡		
12C			

〔注〕

(1) 1957年　山形大学の調査による

(2) 1979年　上山市教育委員会が調査を行なっている

(3) 地主の森谷誠次氏の御好意により、高瀬助次郎、金沢宏一の各氏、及び茨木が参加して確認調査を行なった。

(4) 山形大学の調査、柏倉亮吉先生、小野　忍氏、本間敬義氏らの調査

(5) 高瀬助次郎氏保管。写真は尾形与典氏の撮影による。

(6) 内藤政恒　「東北古瓦図録」　昭和49年

(7) 上山市在住加藤　正

(8) (1)に同じ

(9) 寒河江市教育委員会　「平野山古窯跡群―山形県における古代窯業遺跡の研究―」　昭和45年

(10) 秋葉隆司　「山形市神尾三本木沼発見の古代窯業遺跡」『歴研月報』第14集第74号　1967年

(11) 山形県教育委員会　「三本木窯跡発掘調査報告書」『山形県埋蔵文化財調査報告書』第59集　1982年

(12) 小野忍　「山形市立第三小学校敷地内遺跡出土土器」『山形考古』第3巻第1号　1977年

(13) 山形県教育委員会　「大曽根条里遺構」『山形県埋蔵文化財調査報告書』第6集　1978年

(14) 岡田茂松・桑原滋郎　「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」『宮城県多賀城調査研究紀要Ⅰ』　1974年

(15) (6)に同じ

(16) 真室公一　「米沢市木和田窯跡発掘調査報告(その1)」『置賜考古』第3号　1972年
　小野忍　「山形県における須恵器生産の開始―木和田窯跡出土の須恵器を中心として」『山形考古』第2巻第3号　1978年

(17) (9)に同じ

(18) (13)に同じ

(19) 山形県教育委員会　「山形市柏倉地区遺跡発掘調査報告書」『山形県埋蔵文化財調査報告書』第33集　1981年

(20) (12)に同じ

(21) 斎藤清　「飯の森土師器の編年的考察」『歴史研究168号』　昭和50年

参考文献

山形県　「山形県史考古資料」

山形県　「山形県史　第1巻」　昭和57年

山形市　「山形市史　上巻」

上山市　「上山市史　上巻　原始古代中世編」　昭和55年

米沢市教育委員会他　「笹　原」『米沢市埋蔵文化財調査報告書第7集』　昭和56年

川崎利夫　「平安初期の坏型土器について―山形盆地内出土の二・三の資料を中心として―」『山形考古第2巻第3号』　1978年

川崎利夫　「山形県における土師器編年試論」『庄内考古学第16号』　1979年

佐藤庄一　「山形県における平安時代の土器様相(予察)」『庄内考古学第16号』　1979年

小野忍　「山形県における古式須恵器の様相」『庄内考古学第17号』　1980年

佐藤禎宏・佐藤潤子　「酒田市願瀬山第4号古窯跡」『山形市学研究第7号』　1971年

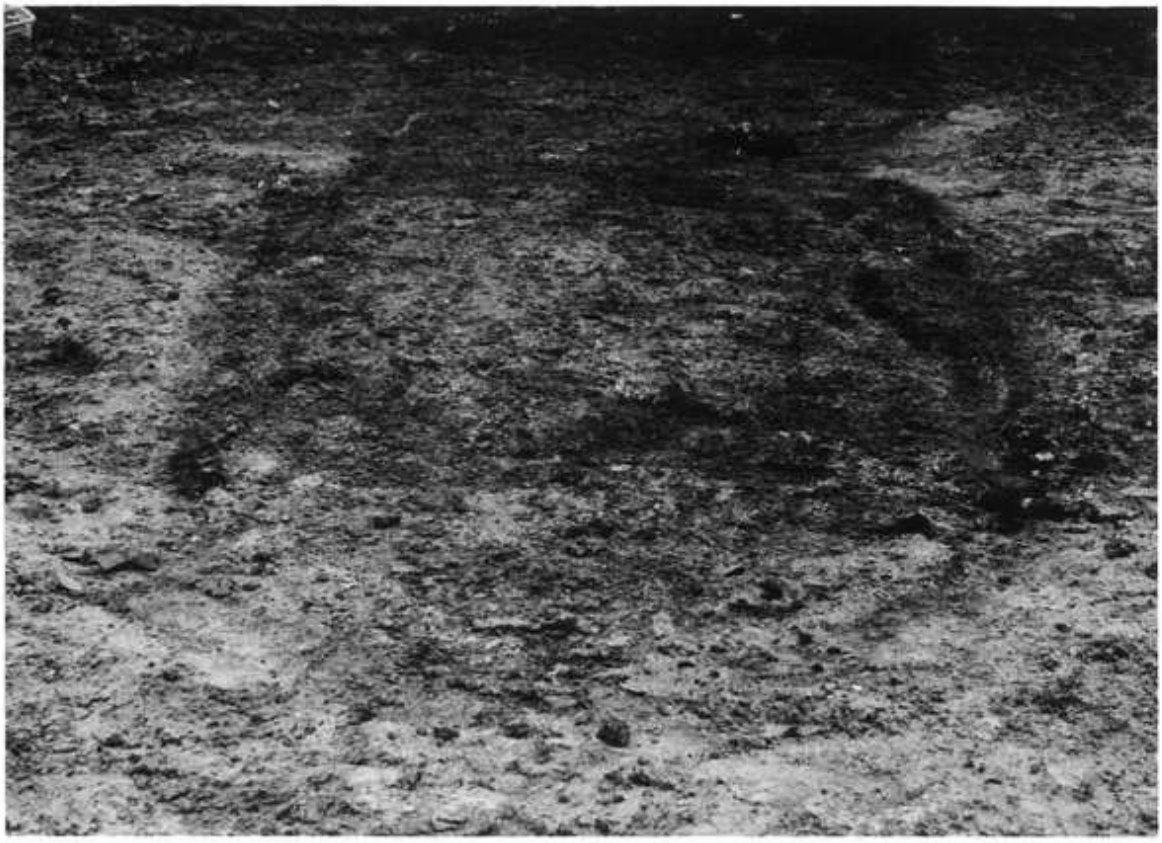
図　　版

久保手窯跡遠景

久保手窯跡近景

遺構確認風景

遺構確認状況



2号窯確認状況

発掘状況

2号窯跡全景 (1)

2号窯跡全景 (2)

2 号窯跡側壁状況

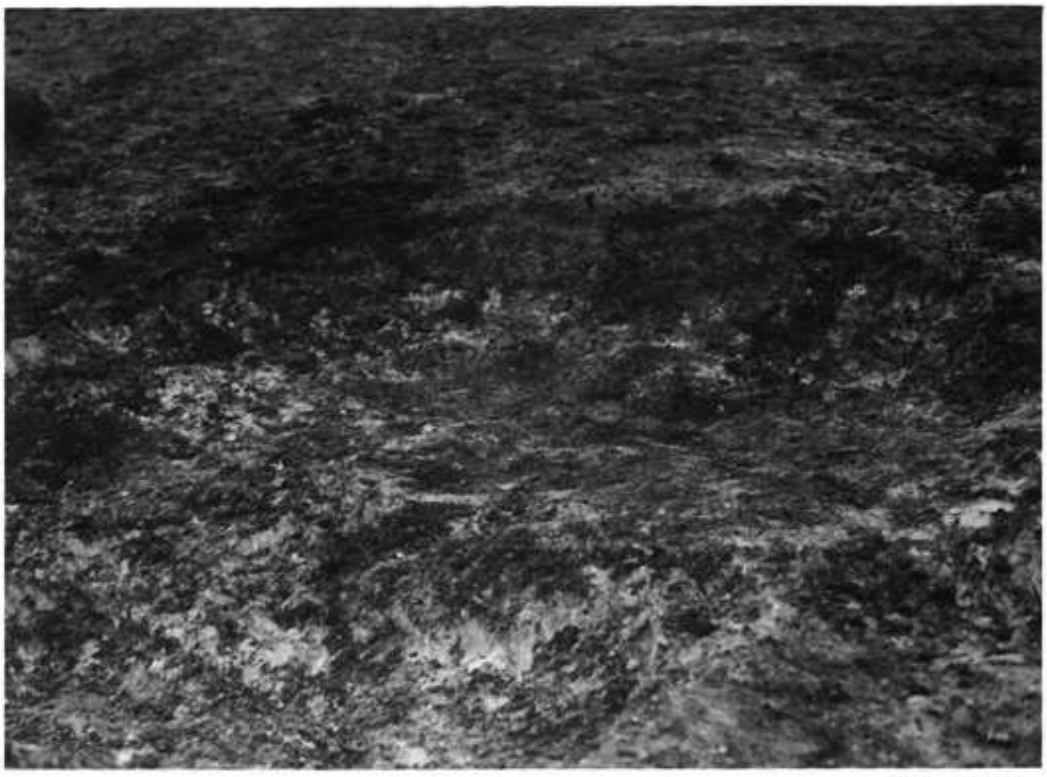
2 号窯跡前庭部状況

2号竈跡遺物出土状況

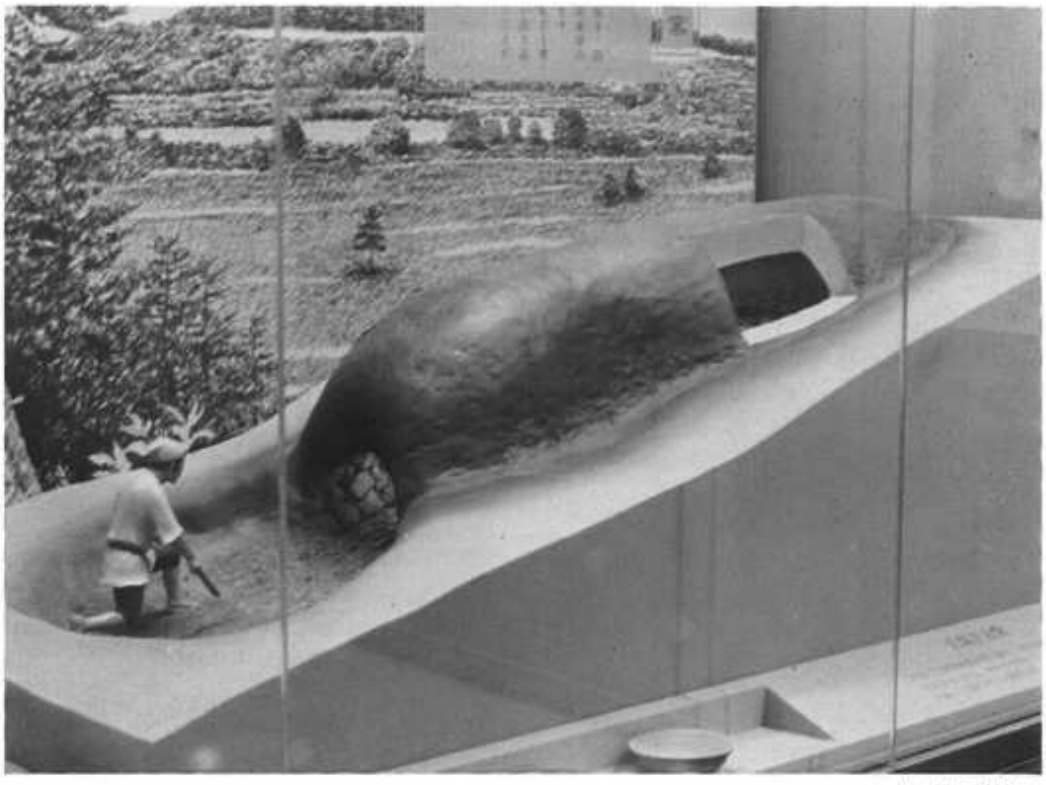
竈跡重複状況

1号窯跡全景

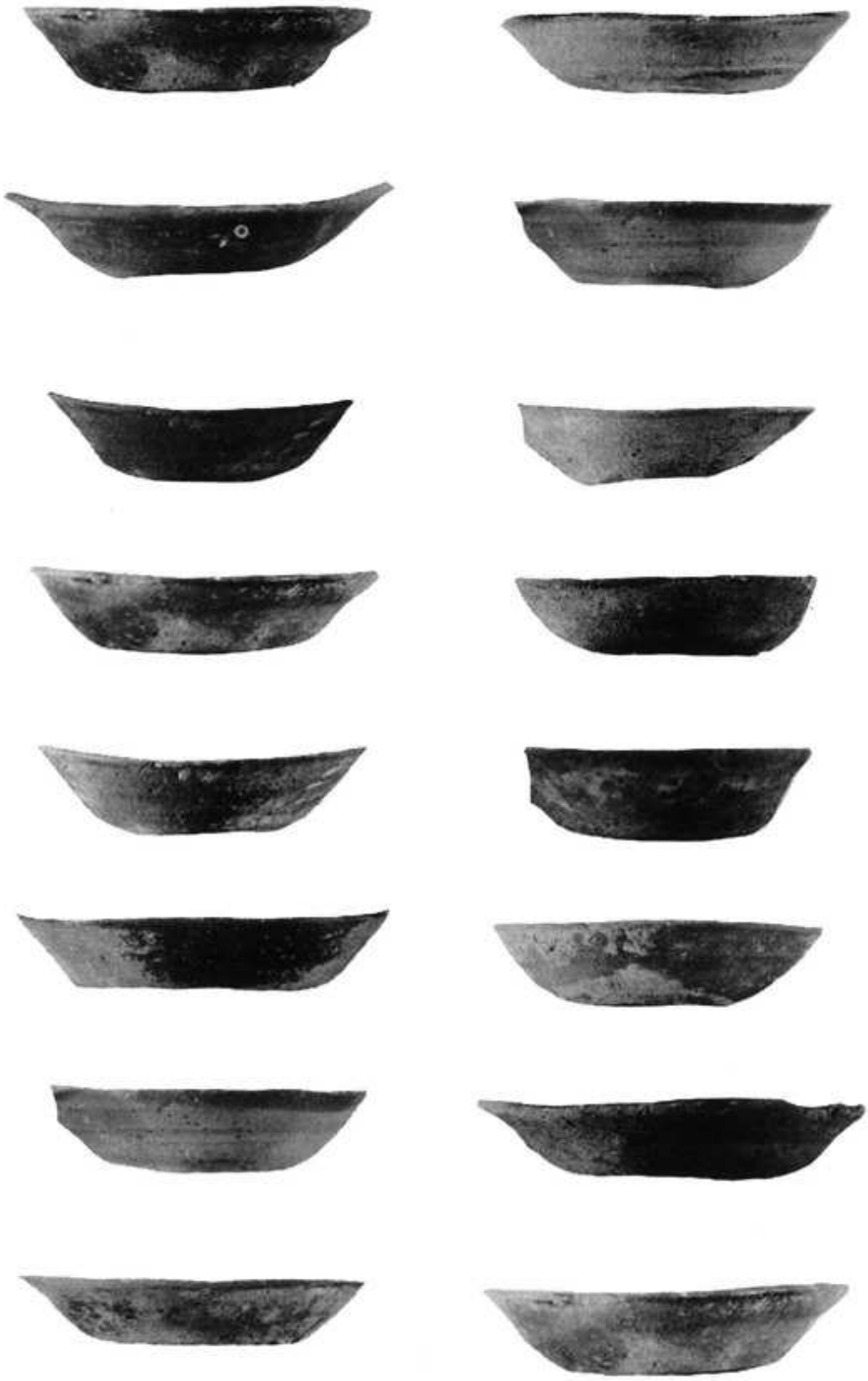
1号窯跡セクション



1号土坑全景



2号竈跡復元模型

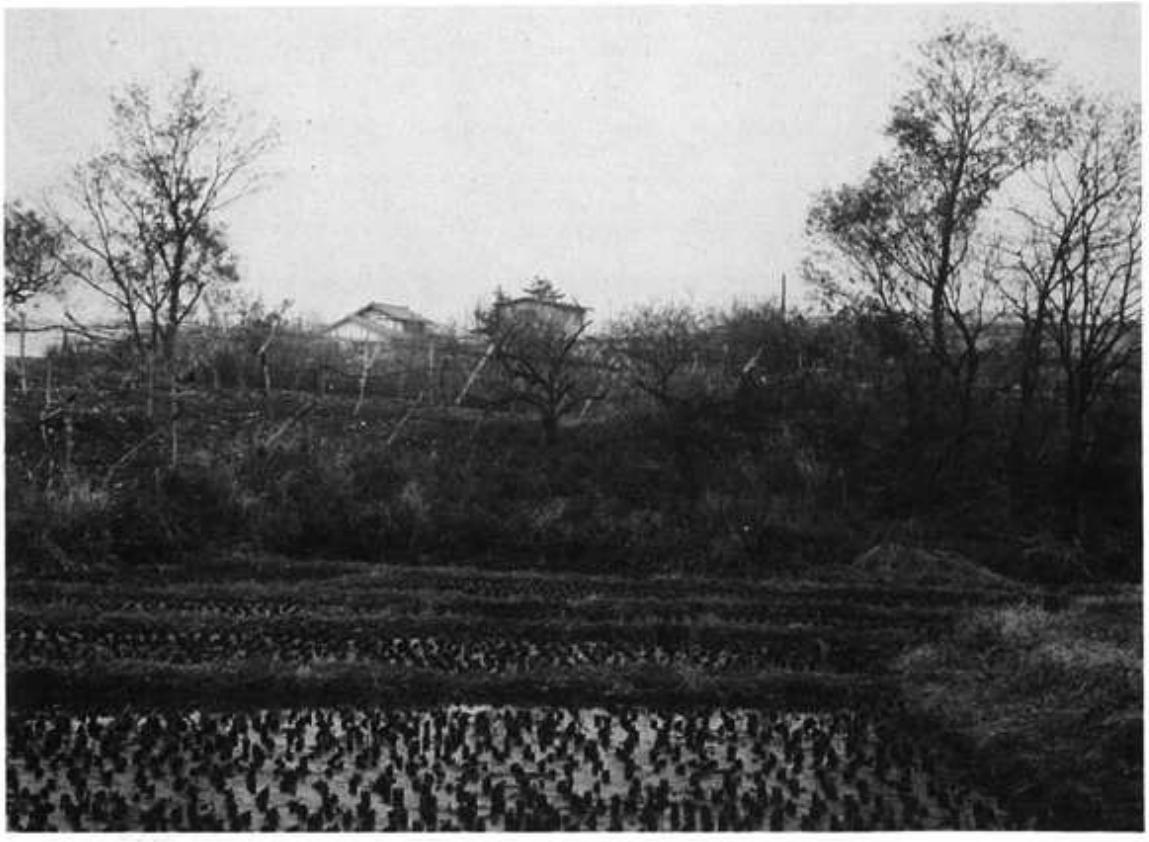


2号窯跡出土遺物 (1)

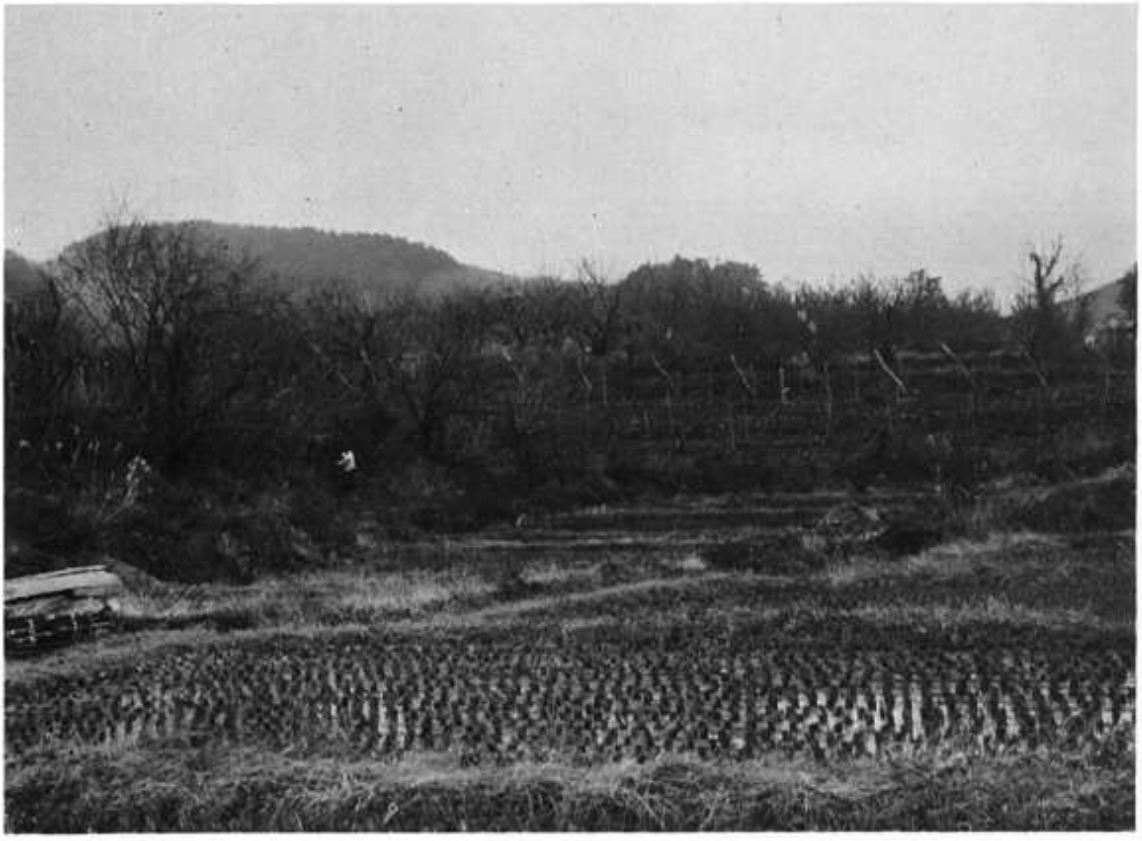
2号窯跡出土遺物 (2)

2 号竈跡出土遺物底部状況

オサヤズ前・オサヤズ窯跡近景



小松原窯跡A地点近景



小松原窯跡B地点近景

B地点出土軒丸瓦（瓦当面）

B地点出土軒丸瓦（裏面）

熊野堂廟跡遠景

熊野堂窯跡近景

三千刈窯跡出土軒丸瓦

山形県上山市埋蔵文化財調査報告書第３号

上山市久保手窯跡

発掘調査報告書

昭和59年２月５日　印刷
昭和59年２月10日　発行

発行　上山市教育委員会
印刷　㈲　加　藤　印　刷